

334  
1424

0<sup>m</sup> 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10<sup>m</sup> 1 2 3 4 5

始



工卜5H-55

334-142

木村鷹太郎着

世界の研  
究に基ける

日本太古史

上卷

東京博文館藏板

大正  
2. 3. 12

# 序文

● 智識を世界に求めて大に皇基を振起すべし——今上天皇

● 皇祖皇宗國を肇むること宏遠に徳を立つること深厚なり——今上詔勅

● 東に美地あり、青山四周す。……余謂に彼地は以て天業を恢弘し

天下に光宅するに足りぬべし、蓋六合の中心か——神武天皇

● 方今區宇一家の如く烟火萬里に及び百姓変りて安く、四夷賓服す

此れ天意區夏を寧かにせんと欲するにあらん——雄略天皇

● 懿なるかな摩呂古朕が心を八方に示せり。盛なるかな勾大兄、吾

風を萬國に光らす。日本筭々として、名天下に擅に、秋津赫々とし

て、譽王畿に重し——繼體天皇

● 持統天皇萬國を前殿に朝せしめ給ふ

☉ 天神の寄さし給ひし隨まに方に今萬國を修めんとす—孝德天皇

☉ 辭別きて伊勢に坐す天照大御神の大前に白さく皇大御神の見霽かします四方の國は、天の壁立つ極み、國の退ぎ立つ限り、青雲の露びく極み白雲の墜り居向か伏す限り、青海原は掉挖干さず舟の櫓の至り留まる極み、大海に舟滿ち續けて、陸より往く道は荷の緒結ひ堅めて磐根木の根履みさぐみて、馬の爪の至り留まる限り、長道間なく立ち續けて、狭き國は廣く、峻しき國は平けく、遠き國は八十綱打懸けて引き寄することの如く皇大御神の寄さし奉り玉へば

……祝詞

☉ 我天つ宮にまし、時、天の下四方の國をふさねて天下の宮たる可き所に光明を放ち見定め置きつ——天照大御神託宣

謹んで歷代諸天皇の詔勅及び神文を按ずるに、誰か日本帝國の規模の雄偉にして、其抱負の壯大なるを感ぜざるものあ

らん。其言必ず「天業」なり、「天下」なり、「六合」なり、「萬里」なり、「四夷」なり、「八方」なり、「萬國」なり皇大御神の見霽かします「極み限り」の「四方の國」なり。是れ實に國典の明文にして、嚴肅なる詔勅なり、又或は神文にして、精神と史實とは言語文字と一致し、寸分文章の虚飾等あるべき筈のものに非ず。詔勅天下と宣せば眞に天下を意味し、六合と宣せば眞に六合を意味し、萬國と宣せば眞に萬國を意味し、決して私意を介みて曲解するを容るさず。此に於てか余は太古日本の理想の崇高にして、又其皇化範圍の宏大なりしを確信し、以て吾人立言の基礎を此に置きて誤らざるを確知するなり。

然るに何者の無識ぞ之に曲解を試み、詔勅等の其等謹嚴なる史實的發表を以つて、單に漢文の虚飾なりとし、雄大なりし

吾國史を強て之を小視し、天下四方たりし皇化版圖を強壓縮  
搾以つて極東の小島中に限り、恬として「皇祖皇宗國を肇むる  
こと宏遠」なるの歴史は之を研究することを試みず、自家の小  
成心に安んじて、毫も「智識を世界に求むる」ことを爲さざるな  
り。嗚呼是れ眞に國を愛し、國史を愛する者の行爲と謂ふ可か  
らざるなり。

余の此言を爲すや、敢て詔勅神文の名を藉りて他人の自由  
言論を壓伏し、以て自己に反對意見を有する者の口を籍まし  
めんとするに非ず。唯其等詔勅全體の性質を考ふるに、其萬國  
と謂ひ、天下と謂ひ、四方と謂ふや、決して内國政治區畫の郡國  
方角を謂ふものに非ずして、世界的萬國四方を謂へるものな  
るの明瞭にして、又た其關係の歴史地理の研究、之を證明する

ものありて、吾人の立説確固動かす可からざるが爲めなり。

由來國典研究者及び國史家等は世界的知識を缺損せるが  
故に、比較以つて其狹量なる成心を矯正することを知らず、獨  
自ら是として、不知不識頑冥不靈に陥れることを悟らざるも  
の多し。國典の尊重を知れるは、吾人決して人後に落つる者に  
非ず、寧ろ日本主義者たるの銘打てる者なることは、天下の齊  
しく認むる所なるべく、余に於ても今尙依然たり。唯夫れ國典  
を尊重するが故に益々余の立説に呪詛たらざるを得ざるな  
り。何となれば日本民族の太古史は從來一切の史家が想像す  
るよりも遙かに遙かに偉大のものたり、日本民族及び其支族  
は世界に誇るべき大業を成せし大民族にして野馬臺の詩が  
「東海姫氏の國(日本)百世天工に代る。……本枝天壤に周く、君

臣始終を定む』との天工に代るもの之れ有ればなり。  
現時の日本民族は、或は夫れ墮落せるか。自家雄大なる國史を有しながら、其大を好まずして、強て之を小と爲し、天照大御神の神業史、神武天皇の詔勅等は殆ど之を忘れ果てし者の如し。

國史學の衰頹今日より甚しきは無し。日本には國史家なし一人も有るなし。是れ智識を世界に求めざるが爲めなり。若し夫れ智識を世界に求めて資て以て國史を研究するに於ては、日本書紀及び古事紀異本等は、日本語以外の他語以つて之を記るし、幾千年來西洋方面に傳はり、其或物は、國史の足らざるを補ひ、其或物は國史の不明を明にし、又其或物は、國史の過誤を正するものあり、之と同時に我國典は彼れの史籍及び言語

に至大の光明を投じ、若し日本學なきに於ては西洋方面の事物研究も不完全に終るもの有りて存するを知る。實に是れ智識を世界に求めて、所謂比較研究に由りて得る所の利益にして、其利益たるや我を利し、彼を益し、以つて世界の史學に新紀元を開き得るものたるなり。

比較研究既に此點にまで進行し、日本民族史の記録の一部は幾千年來西洋方面に保存せられあるを知りて、而も尙ほ目を蔽ひ、耳を蔽ひて知らざるを爲さんとするは、是れ頑に非ずんば痴なり。況や彼方面に存する記録の日本民族に關する記事の美と大となるに於てをや。孔子曰く『學へは固ならず』と。然り、又た愚を去ることを得へし。

日本從來の比較宗教家、言語學者及び歴史家の多くは、其れ

或は怠惰なるに非ずんば學識甚だ狹小にして淺薄ならんか。又た若し兩者に非ずんば見識極めて下等なるか或は無能力なり。古は神武天皇を以て吳の太伯の後なりと言ひて奇禍を買ひし學者ありしと雖、今の大學の多くの學者等は其れにも劣りけん、日本人の起原を以つて南洋土人の夫れと爲し、或は滿洲蒙古の未開野蠻人に起原すと爲し、或は朝鮮渡來の人種と爲し、日本人種劣等起原説を爲して何等の罰を被ることなし。眞に聖世の餘澤と謂ふ可し。今日斯學方面の帝國大學の如きは、日本人種劣等主義論者及び「低能學者」の「巢窟」と謂ふべく、學問智識の淵源などは思も寄らざる名稱なり。之に反して不思議なるは、西洋人の日本人種觀なりとす。素より盡くとは謂ふ可からずと雖、其内或者は日本人を以つて

アリアン族と爲し、日本人の優等性を認め、又或はシナイ半島より東遷し來りしとまでも謂へる者ありて、組織的研究としては觀るに足る者なかる可しと雖も、吾人の研究と一致せるものなきに非ず。又其或者は日本事物の希臘的なるを謂へる者もこれあり、大に帝國大學者流の日本人を劣等人種視せると趣を異にせり。故に若し帝國大學者流の無見識と怠惰なるとに乗じて、慧敏なる西洋人ありて、其著眼を以つて、日本の言語、神話、歴史及び其他の事物を研究したらんには、日本人種起原の眞理は、外國人の發見する所となり、日本人は日本帝國發祥の地、自家太古の祖先の墳墓の地は、之を外國人に學ばざる可からざるの不名譽を被らざるを得ざりしや必せり。是れ國辱なり。其時責任何れに在るべき。

然るに幸にも天は此不名譽を日本人に下さず、日本人の頭腦を藉りて其發見を爲さしめ、日本人の手に由りて其發表を爲さしめたり。然りと雖「神は之を知者學者に隠して赤子に顯はす」。余や斯方面の學問に於ては赤子たるに關はらず、特に斯學の門外漢たる余を選びし神意は之を知らずと雖、天命躬に在るを感じ、肅然として自ら彊ふす。意ふに、或は來らん所の前記の國辱は、余を通じて働く所の天祐に由つて之を遁るゝことを得たりと謂ふべし。

余は日本民族の希臘羅典系にして、太古に在つて小亞細亞の天(あめ)即ちアームニヤ即ち耶蘇教の謂へる所のエデンの地に起り、希臘、埃及等に國し、世界を打つて一丸と爲して之れを我版圖と爲し、北は北歐スカンデナヴィアより、東は印度暹羅

に至るまでの植民及び皇化範圍を有し、吾皇室は世界の中心たり、吾民族は眞に歴史的に野馬臺の詩に「本枝天壤に周く」と言へるが如くなりしを發見し、發表する者なり。單に世界の中心たりしのみならず、吾民族は、現存諸人種中の文明的最舊民族にして、又吾皇室は世界の最舊王家たるなり。

今若し日本史、支那史及び希臘方面の材料に據つて比較研究を行ふに於ては國典中の事代主神(又日本武尊に當る)は希臘に於てはアポローンの神たり、支那に於ては夏の禹王たり、カルダヤに於てはウル王或はウルク王(Ur-Uruk)に當り、同一人物を諸方に傳へて種々に名稱せるものなるを知る。而して支那の夏とは波斯西南方エラムの地にして(此時支那は未だ極東に移らず)、之れ事代主神の祖先須佐之男の名稱の出づる所



のササ府の所在地たるなり。若し夫れ年代を謂はゞ西洋歴史に於てはニムロッド王より遠からずと爲し、神話時代に屬せるなり。西洋人の研究して定めたる年代は、盡く之を信すべきに非ずと雖、吾日本書紀の神功皇后紀中の拷衾新羅王の名は彼れに在つては傳說的なりと爲せる所の羅馬王タルクイヌス家の王名に合し、其同一人物なるを知り、其西洋方面の現定年代に據る時は、是れ耶蘇紀元五六百年前にして、若し其方面より見る時は、吾神功皇后は日本紀年の神武天皇時代に當るべく(實は尙ほ古代なる可し)。又た神武天皇及び皇兄稻氷命及び御毛入野命の御名の西洋方面に傳はれるものに比較し、特に御毛入野命は埃及王即ち常世國王ミケーリノス王に當りませりとせば、西洋方面の年代は耶蘇紀元前二千七百年頃にし

て、今よりは四千年の以前に當り、吾皇室は世界史上に於ても最大舊家たるを示めせりと謂ふべく、又若し羅馬詩人ビルギリウスの「イナイ」傳の詩に據る時は、其イナイ(Aeneas)はイナイ(稻氷)命に當り彼れに在つては其子なりと傳ふる所のイウレウスは吾のイワレヒコ天皇磐余彦、神武天皇に當るものゝ如く、稻氷命の新羅の祖なりとの吾國の傳記は、彼れに在つては羅馬帝國創建者なりとの傳説に當り、後代羅馬の大帝ユリウス・ケーザルはイワレ(イウレ)家の後裔たるを示めせるものゝ如く、又若し西洋所傳の系圖を溯る時は、ホメーロスの歌ひし所のトロヤ王家に關係あるを知り、吾皇室の尊嚴偉大なるは、實に世界的に堂々たる證據と記録とあるものと謂ふ可し。只其紀年の彼我の相違に就ては尙ほ今後の研究に待つべしと

雖、日本の史料たる稗田阿禮口述の古事記、又た其等を材料とせる日本書紀等は必ずしも完全なる記録を存せるものと謂ふ可からざるが如し。何となれば、歴史家の立場より謂ふ時は、其等の書物は只だ一史料たるに過ぎざればなり、世界的比較研究之を教ふ。此くて吾人は日本史料の不完全なるものあるを知ると雖、之に由りて、却つて日本民族の一層の大を知り、吾皇室の一層の尊嚴宏遠なるを知りしは、一層に愉快なること、謂はざる可からず。然りと雖我に傳へたる史料の世界的重要なる寶典なることは、決して忘る可からざるなり。

茲に吾人は謂へらく、日本民族の言語は、世界文明人種中の最も舊きものにして而も其現在までも活けるものたり、日本民族の太古史は實に世界の太古史たり、中心史たり——西は西

歐北歐より、埃及を中心として、東は極東に至る間の歴史及び其地理を奄有し——日本民族の言語及び歴史なきに於ては、歐羅巴は勿論世界の言語及び歴史等は決して完全に知ること能はざる可く、支那太古の歴史地理の如きも——吾人の方法を以つてせる所の比較研究に依りて日本を研究し、之を應用するに非ざれば——決して眞正のものを知り得ざる可しと。何となれば支那民族も亦太古西部亞細亞より極東に移動したる者にして、彼れの太古史三皇五帝記は小亞細亞、埃及の地たり、夏、殷、周初はカルダヤ、アッシリヤ方面の地に於ける歴史なればなり。且つ其太古史は日本太古史と錯綜して、別名稱、別言語を以つて天皇氏以來日本民族祖先の歴史を彼れの歴史として、其民族史の首に冠せるを知るに於ては、此方面よりするも吾

人亦吾祖先の活動の大と、吾歴史の悠遠なるを學び、又吾れに傳へたる史料の足らざる所を補ひ、以つて吾民族の歴史を大成せしむるものたるなり。

博士穗積八束氏は今年一月の御講書始に於て、日本建國の大本として、古代の希臘羅馬人が祖先を崇拜し、父母に孝に家を愛し、國を愛することより、親族及び相續の制度等全く我日本の制度と同一なる由を陛下の御前に進講せられたりと聞く。亦是れ余の神話、言語の比較及び地理的研究の他方面の研究問題として見る可きなり。

「世界に求めし知識を以つてする所の吾人の比較研究の功益此くの如く夫れ大なり。時に余は謂へらく、此くの如きの發見は斯學専門家の間より出づべかりしものと。然りと雖悲

しいかな日本には活眼達識の史學家、言語學家、神話學者、及び地理學者なく爲めに何等研究的發明的のもの出づること無く、只だ拔萃的翻譯的編輯的のものあるのみ。

日本民族は實に希臘羅典人種にして、吾國の言語、歴史、宗教社會組織等皆く全其系統に屬せるなり。然るに日本の學者は此方面に心付ける者なく、帝國大學の如きすら希臘羅典の學に至つては、殆ど之を缺如せるものゝ如く、假令多少は之れ有らんとするも、是れ漸く語學程度に止まり、其人種、其思想、其信仰、其社會、其歴史の神髓は之を得ざるものゝ如し。彼等の所謂比較研究なるものは、日本と關係薄き印度を以つて目標と爲し、淺近なる事物は之を支那に比較し、聊か不明のものは直に之を印度に求むるに止まり、其れよりも尙々根本的而も直接

なる希臘羅典及び埃及等には彼等思ひ至らざるものゝ如し。既に比較の目標を誤る彼等、如何てか眞正の結果を得べけん。是れ彼等帝國大學の人々は西洋の下等なる比較言語學者比較宗教學者を盲信し、自家獨創の研究心なきと、見識なきとに依り、随つて希臘羅典及び埃及學に着眼し得ざりしに依るものゝ如し。

吾人茲に日本學の現状を見て、日本學の振はざる尙ほ他の原因ありて、如何に多くの専門家あらんとも、到底無用に終るの理由を知れり。其を何とか爲す。曰く、彼等の學問の跛なることなり。比較研究は跛者の能くする所に非ず、其學能く兩者に通じ、之に跨がりて始めて行ふを得るものなればなり。

從來の國學者、漢學者の多くは、境遇上世界的知識を得べき

機關たる外國語を知らず、爲に智識上の跛者たらざるを得ざるもの有るが故に之を問題外となす。然るに新學問に教育せられ、世界的智識を收得し得べき者は、薄志弱行の徒多く、多くは日本の國典等は之を忽諸に附し、殆ど此方面の知識を有せず、學識跛して比較研究者たるの資格を缺損するなり。又た假令國學に就て幾分の知識を有し、外國語亦之を能くする者と雖、外國の神話を知らず、歴史を知らず、地理を知らず、爲めに完全の比較を行ふ能はず、或は神話は之を知るも語學に短に、歴史は之を知るも、神話を知らず、語學を能くせず、此くて比較に最後の判断を下す能はず、遂に無結果に終らざるを得ざるなり。

されば比較研究に結果あらんと欲せば、必ずや其學東西を

兼ね、言語、神話、歴史、地理、社會、國家萬般の事物を識り、諸方面より、一齊に比較討究し、或は想像し、或は假定し、又は自ら自己の想像及び假定を批評し得るの人物ならざる可からず。斯學の専門を自稱せる學者にして、此の資格を有せる者日本果して幾人かある。蓋し多々之れ有らん。然りと雖不幸、余は今日一人も之れを知らざるを悲しむ。此方面の學術の比較研究の振はざる眞に故あり。

特に國學者の老大家と稱する者と雖、國典地理に關しては全然其意を用ゐざるが如きは、彼等の研究心の薄弱なるを示めすものなり。若世界的知識なく、假令國典地理を正當の實地に配當し、發見し得ずとするも、尙ほ夫れに就て疑念起る可き筈なりと雖、何等の疑念だに起すことなく、只た之れを不明に

放任し去りて恬然たり。

他方新知識を有せる者も、國典に就いて毫も眞面目に嚴密なる考究を行ふことなく、探索せず、勉強せず、何等舊來の國學者漢學者流儀の日本研究の範圍を抜け出づることなく、只だ狹隘なる區域に索強附會を是れ事とするのみにして、敢て堂々疑問を起し、首を回らして其の解釋を世界的に求むることを知らず、怠惰に加るに無學と無見識とを以てす、憫然の至と謂ふ可し。而も彼等自家の無知無識を悟らずして、却つて嬉々として他を笑ふ。宛も是れ斥鷃が大鵬の飛揚を笑ふが如し。笑ふべきこと之より大しきはなし。彼等の嗤笑は素より論ずるに足らずと雖、只夫れ群小雜輩が眞理の傳播を妨害して、自家の無見識を以て他を強ひて之に效はしむる事を惡む。

然りと雖眞理は力なり、向ふ所は之を破り、敵し來る者は斃る。

日本民族は長年月の間極東の小島に閉居し、因習の久しき思想抱負漸く卑屈に陥り、辛くして日清日露の兩役に由りて聊か自己の有せる力量を覺知し來りし如きも、尙ほ未だ十分自覺の域に達せず、之が爲めに當然活潑々地たるべき國民の元氣活潑ならざるものあり。然に幸にも天は日本人に與ふるに歴史の新發見を以つてし、日本民族の祖先の世界的功業と雄圖とを回想せしむ。庶幾くば國民の自覺を強固にし、其抱負を遠大ならしむることを得んか。

若し夫れ純然たる學術の點より謂ふも、余の今回の發見に由り、日本學は今後非常の發展を爲すは余は之を確信す。何と

なれば日本の神學、言語學、其他の研究は、從來宛も鉢木の如く、狹隘なる地に生育し、之が爲めに營養不良或は將に枯死せんとせるに比すべかりしも、一旦之を鉢より下して母なる大地に扶植し、希臘羅典其他世界的の知識を以て、比較し、補足し、訂正して、培はんか、今まで痿縮瘦瘠せる國學の植物は、忽ち生々力を回復し、幹根枝葉大に繁茂し、天を蔽ひ、東を蔽ひ、ひなを蔽ふの「も」たる「Mono-Dareus」大王木と成るや必ず可けばなり。單に是日本學を益するのみに非ず、又能く東西を連絡し、日本支那方面の材料を以つて、西洋所傳の材料を補正し、以つて世界の太古、人類學及び人種學の完成を致さしむるを得べく、日本學なくば世界學は決して完成せられざるべく、吾人の發見は此の方面に於て確かに一新紀元を開くものたるべし。

然と雖余や言語學者に非ず、又歴史家にも非ず。微弱なる言語の才と粗大なる歴史の知識とを以て、斯學の大海を辛くして此港にまで漕着きしに過ぎず。されば研究材料の如きは殆ど之れを有せず、古事記、日本書記、萬葉、祝詞を基礎とし、比較用として僅かに二三冊の希臘羅馬神話書、希臘字典一部、羅典字典一部、大英百科全書、センチリイ字書等を有せるのみにして地理に關しては古事記日本紀は素より之を研究の目的物と爲し、他は僅かに學生時代より持有し居りしブツゲルの歴史地圖、ラバートン地圖、フツシー萬國史、其他三四の西洋史書あるのみにして、而も今回の研究には、何等材料を買ひ入れず、又た借り受けも爲さざりき。然りと雖も材料の貧少憂ふ材料此くの如く、夫れ貧少なり。然りと雖も材料の貧少憂ふ

るに足らず。此貧少なる材料を以てするも、頭腦を活動せしめて尙ほ能く大研究を爲し得たりとせば、他日若し材料を蒐集して大研究を行はんか、之れ余の期する所、余は必ずや至大の結果を收め得べきことを斷言し、かの徒らに材料に富めるも、何等の研究をも發見をも爲し得ざる者に比する時は、吾人の如きは最も善く少材料を活用したるものと謂ふべく、却て之を誇らんかな。

然りと雖、研究材料は必ずしも紙に印刷したる書物のみに限るに非ず、余はム子モシネー(Mnemosyne)文庫を頭腦中に有し、萬卷の材料は自由に之れを使用し得たることを告白し、ミューズの神たる天之御中主、神神漏伎、神漏美、神々に感謝を奉る。特に國典地理の研究に於て現日本の地理と、國典地理との

別物なる事は古事記、日本書紀等を精讀したる者は、必ず之れに氣付くべしと雖、特に萬葉集の地理研究は之を吾人に教ふるなり。されば余は萬葉集を以つて舊國學の「裏切地理書」と命名す。此他尙ほ古代地理の研究上、看過すべからざるは「謠曲」なりとす。其古きものは日本古代の、現日本の地に非らざりしを示めせるものにして、其の研究上の價值に至つては或は萬葉以上と謂ふべきなり、是れ亦裏切地理書なり。然るに從來の歴史家地理家之を感じず、只空々と讀み去れり。彼等の研究力知るべきのみ。

其他從來の國典家等の偽作なりとして顧みざる所の古風土記等は非常の價值あるものにして、彼等の以つて偽作なりと爲すは、現日本の實地々理と合はざるが爲めなり。而して其

合はざるは、大に合ふ所以にして、之を世界的日本の地理に考ふる時は、寧ろ正確なるものゝ如し。かの「倭姫世紀」の如き、之を現日本の地理に當てゝ讀む時は、殆ど吾人の理解以上なりと雖、若し之を希臘、シリヤ、埃及、アーマニア、波斯、印度、亞拉比亞、アビシニヤ地理に當てゝ讀むに於ては、寧ろ甚だ正確、詳細なるの感あり、而もアレキサンドル遠征地理よりも雄大なる旅行地理なり。然るに日本の歴史地理家等之を知らず、此く雄大なる地理書を遇するに偽作を以つてす。あゝ危かりしかな。吾人は所謂正史以外、民間の傳説及び偽作と稱せられしものゝ内に正史以上の眞史正史あるを思ふ者なり。

年月の悠遠なると、種々の災厄とに由りて、日本は甚だ多くの有益偉大なる史料を失喪せるものゝ如く、之に加ふるに一



時の國變的政策に由りて、世界大史料を政府の力を以つて破壊したることもあり、又た正面的明瞭なる文章を以つて史實を發表すること能はず、爲めに稗史小説の體裁を藉りて辛くも之を後代に傳へたる時代もあらん。されば國史の研究家たるものは紙背に徹る的眼光を以つて、種々の材料を所理せざる可からず。所謂正史必ずしも正史に非ず、或は一時の政策史ある可ければなり。

要するに日本太古史は世界太古史なり。吾太古史の天下萬國を謂ふや眞に文字通のものたりしなり。然るに是を之れ思はずして、妄に之を曲解し宏大なる日本は強て之を縮壓して小視し、爲めに國典の記事に合はざるが故に國典各方面に不明予盾生じ、之が爲めに、索強附會を之れ事とす。是れ今日の日

本太古史研究の状態なり。豈誤れるの甚しきものに非ずや。

本居平田其他國學の大人物は吾人之を尊敬す。然りと雖其尊敬や其精神にあり。學術は進歩するものなるに於ては、吾人其等諸大人の狹隘なる舊知識を以つてせる所の解釋に束縛せらるべきに非ず。本居平田の諸大人、若し現時に出でしならんには、必ずや余の言に聽從するや必せり。吾人は聖勅に従ひ智識を世界に求めて、大に皇基を振起せざる可からず。

余が今回の研究に着手したるは一昨年秋にして、着手より二個月にして希臘關係を發見し、夫れより數月にして今回發表する所の大體を研究し、此に於て研究しつゝ、書きつゝ以つて今日に至れり、此間僅かに一ケ年、世間の人々の如く、十年

の研究、或は二十年の研究等を誇るものに非らず。然りと雖此短少なる一ケ年は、余は世事を擲ち、交際を謝絶し、食は口に味を知らず、夜は夢に於て研究と思考とを續けたれば、此一年間は殆んど普通の五年十年に相當するを感ず。

本書希臘語羅典語其他の外國語を用ふること少なからず、日本の讀者にして外國語に親しからざるものゝ爲めに、一々之れに發音の振假名を施こし、成らん限り讀み易からんことを計れり。又た其發音たるや素より正確なるを期せりと雖、亦日本語と希臘羅典語との同一なるを示めさんが爲めに、成るべく日本語に近き發音を取り、以つて彼我の連絡を保たしめんが爲めに架橋的發音を用ひし部分少なからず、是れ却つて便利たる可ければなり。

本書別ちて三卷と爲す。

第一卷―第一編神話比較、第二編言語比較

第二卷―第三編(上)國典の歴史地理の研究

第三卷―第三編(下)國典の歴史地理の研究

即ち是れなり。

余は日本研究は眞に世界的のものにして、決して狭く日本に限るべきものに非ずと信ず。されば全部出版の上は之を外國文に翻譯して大に天下の學界に問はんと欲すと雖、目下は只だ大意を報告せんが爲めに内容の大意と目錄とのみを英譯にして卷尾に附す。

明治四十四年二月紀元節

東京 木村鷹太郎識

本書は、世界の研究に基つける日本太古史第一卷目次  
 第一章 天地開闢  
 一 神話の比較に就て  
 二 高天原の神々  
 三 オルフュウス派の天地開闢説  
 四 ヘシオドスの開闢説  
 五 神名の日本及び希臘對照  
 第二章 おのころ島  
 一 日本神話の「おのころ島」  
 二 海神ポセイドーンの浮島

世界的研究に基つける 日本太古史第一卷目次

總論 本書著作の由來と論述の順序

第一編 神話比較

第一章 天地開闢

- 一 神話の比較に就て……………一
  - 二 高天原の神々……………一四
  - 三 オルフュウス派の天地開闢説……………一七
  - 四 ヘシオドスの開闢説……………一九
  - 五 神名の日本及び希臘對照……………二四
- 第二章 おのころ島……………二九
- 一 日本神話の「おのころ島」……………二九
  - 二 海神ポセイドーンの浮島……………三一

目次

三 アポロンの臍石……………三三

四 「おのころ」の希臘語……………三五

五 尙他の希臘語——「みとのまぐはひ」「ふとまじ」「あなにやし」……………三七

**第三章 火神迦具土……………四二**

一 二神の國生み——迦具土神の生誕……………四二

二 迦具土の語原説明……………四七

三 カクスの赤牛神話と火との關係……………五〇

四 天の尾羽張の劍とラーアリオンの神話……………五四

五 迦具土命と迦久の神とカクスと……………五六

六 ウラノス神の血……………五七

七 「美蕃登」の希臘語……………五九

**第四章 伊邪那岐命の黃泉國行き……………六二**

一 伊邪那岐命の黃泉國行き……………六二

二 オルフュウスの黃泉行き……………六四

三 プロセルピナの黃泉戸食……………六七

四 オヂュッセウス黃泉國より遁れ歸る……………七〇

五 黃泉醜女とヨウメニデース——「ヨミ」(黃泉)の希臘語……………七二

六 アタランテーの林檎……………七五

**第五章 伊邪那岐命の禊祓……………八〇**

一 伊邪那岐命の禊祓……………八〇

二 希臘及び羅馬の禊祓——アポロンの禊旅行……………八二

三 「伊那志許米」穢繁國の希臘語……………八五

**第六章 天照大御神の御生誕——世界三分統治……………八八**

一 三貴子の生誕——世界三分統治……………八八

二 目に關する希臘熟語と日月……………八九

三 アテーナ女神の生誕……………九〇

四 愛の女神アフロデテー……………九一

五 希臘神話の世界三分統治……………九三

六 世界三分統治神話の日本希臘對照……………九五

七 王の緒「母由良邇」の希臘語—國典研究の樞要語……………九七

八 「御倉板擧之神」名と「統治權」……………一〇〇

九 天照大御神とアテーナ女神との御頸珠の王の緒……………一〇三

**第七章 尙武護國の天照大御神**……………一〇六

一 天照大御神の尙武護國……………一〇六

二 アテーナ女神と海神ポセイドーンとの競争……………一〇九

三 アテーナ女神の武裝及び護國……………一一一

四 彼我兩神話の異同……………一一二

五 「根之堅洲國」は新植民地を意味す……………一一三

六 稜威の「雄詰」と「噴讓」との希臘語……………一一五

**第八章 天照大御神の御子**……………一二七

一 皆是尙武の男神女神……………一二七

二 神名の意義……………一二九

三 アテーナ女神の別名……………一二九

四 弘安の役とベルシア戦争……………一三三

**第九章 天照大御神の岩窟隠れ**……………一三六

一 須佐之男命の亂暴—天照大御神の機織農耕調馬……………一三六

二 アポロンの亂暴と其流謫……………一三九

三 アテーナ女神と織女アラクネー……………一四四

四 「あらがね」のつち……………一四七

**第十章 須佐之男命の大蛇退治**……………一五一

一 八俣の大蛇と稻田姫……………一五一

二 ヘーラクレスの九頭龍退治……………一五四

三 ベルセウスの神話……………一五六

四 稻田媛關係とアンドロメダ關係……………一六七

五 草薙劍……………一六八

六 須佐之男命の毛髮及び樹木神話とアトラス神話……………一七七

七 須佐之男神話中のヘルシア及びホエニシア分子……………一七八

八 「おろち」は希臘語の山なり……………一八一

九 「ゴルゴン」の妖怪は日本兒童も之れを知れり……………一八三

**第十一章 大國主神**……………一八六

一 大國主神の國造り……………一八六

二 金毛羊皮取り……………一八六

三 サムソンの頭髪……………二〇四

四 神醫アスクレーピオスの治療法……………二〇六

五 大國主神とアスクレーピオスとの鼠……………二一六

六 「眞髮ふる」寄稻田姫と奇しきメデア姫との混合……………二一六

**第十二章 酒神少名彦名神**……………二二一

一 少名彦名神の渡來……………二二一

二 古事記と日本紀との相違……………二二三

三 曾富騰の神に奉る祈禱……………二二六

○

四 酒神ディオニソスの生誕……………二二七

五 倭迹々日百襲姫とセーメレ姫……………二三一

六 デオニソスの羅摩船……………二三三

七 「かゝみ船」とナキソス島の「カントル」(鐘樽)船……………二三八

八 磐楠船と薬師……………二四三

九 「ひむし」の皮衣……………二四四

十 谷蠨と曾富騰……………二五一

**第十三章 豊葦原の瑞穂國**……………二五九

一 大國主神の國造り……………二五九

二 ヤンソ遠征の別傳の如し……………二六三

三 愛と心—アモール彦とプシケー姫……………二六六

四 イヨ姫と雉との神話……………二六九

五 白鳥(きりし)の神話……………二七三

六 高木神の神性……………二七八

七 「うしはく」とは何を意味す……………二八〇

八 「天の逆手」とは船の風防なり……………二八二

**第十四章 大國主神は猶太教のヨセフなり……………二八七**

一 猶太經典の證明……………二八七

二 『八雲立つ出雲』とヤコモとイドム……………二八九

三 大國主、神話中のヨセフ及びベニヤミン分子……………二九〇

四 サムソン分子とダビデ分子……………二九四

五 須佐之男命の太刀と弓と、ヤコブの太刀と弓矢……………二九八

六 福神大國主、神と、福人ヨセフ……………三〇〇

七 大國主、神もヨセフも顯國玉 Usus Cognitum なり……………三〇四

八 大國主神の二子とヨセフの二子……………三一二

九 待遇の首尾一貫……………三一七

十 建御名方神の諏訪の宮とはエルサレムなり……………三二〇

十一 事代主、神と、アポローンと、猶太教のモーゼ……………三二五

十二 大國主神は基督教の種子……………三二九

**第十五章 國典中の奇蹟とモーゼの奇蹟……………三三四**

一 建御雷神の奇蹟とモーゼの奇蹟……………三三四

二 謠曲「和布刈」の文章と「出埃及記」紅海渡渉記の文章……………三三七

**第十六章 神典祝詞の世界的價值及び猶太關係……………三四二**

一 世界一等の書……………三四二

二 最大至高の理想——世界人類の平和……………三四三

三 「八十」と耶蘇——「大和」と救世主義……………三四五

四 世界文化の源泉——宮中八神は「ミューズ」の神々「蓬萊」は御年の神々……………三四七

五 猶太教中の大思想は日本思想の標竊なり……………三五五

六 猶太人の日本民族に對する位置……………三六〇

七 祝詞の歴史地理的價值——日本太古の版圖……………三六四

第十七章 耶蘇教は酒神ディオニソス教の

變形

- 一 耶蘇教は編纂的宗教……………三七四
  - 二 耶蘇とディオニソスとの性行……………三七六
  - 三 兩教々理上の同一点……………三七八
  - 四 耶蘇教は酒神教の變形……………三八一
  - 五 酒神と耶蘇との美術上の表現……………三八八
  - 六 耶蘇教善美の部分はプラトーンよりの拔萃……………三九〇
  - 七 耶蘇の生卒及び傳道と、ソークラテース及びプラトーン……………三九七
  - 八 耶蘇教は希臘民族の產物……………三九八
- 第十八章 耶蘇教の美麗なる觀念重大なる思想は日本に起原す……………四〇四
- 一 野の百合—須佐之男家に起原す……………四〇四

第二編 言語の比較

第一章 總論

- 一 從來の比較言語學者の弱點……………四三一
  - 二 日本言語學家の無見識……………四三三
  - 三 愛國心なき日本言語學者……………四三四
  - 四 西洋の言語學に捕はれし言語學者……………四三六
  - 五 語原學を缺損せる日本言語學界……………四三八
- 第二章 神代文字—片假名の起原……………四四二



一 神代文字有りき……………四四二

二 神代三體文字の表……………四四四

三 片假名の起原及び製作……………四四六

四 片假名の製作……………四四八

五 片假名起原一目表……………四五〇

六 支那字の或者は神代文字より構成せらる……………四五八

七 モアピ石の文字と日本片假名……………四六五

八 日本文字改良羅馬字家に一言す……………四六八

**第三章 發音及び音變化の法則……………四七〇**

一 發音緒言……………四七〇

二 五十音圖の學術的價值……………四七二

三 發音の變通及び轉訛法の概觀……………四七五

**第四章 言語對照表……………五〇五**

**第五章 言語比較の例證(一)……………五四九**

一 船に關する諸言語……………五四九

二 海及び沖……………五五五

三 人倫に關する諸言語……………五五六

四 「ものゝふ」「ますらを」「さむらひ」……………五五九

五 「候(そうろう)」と「侍(さむらひ)」とは別語原……………五六一

六 歌謠中の希臘羅典語……………五六二

七 音樂上の言語……………五六四

八 日本の數……………五六七

九 十二ヶ月の語原……………五七五

十 阿漕研究……………五八三

十一 端午と武内……………五八八

十二 彼岸……………五九一

十三 神名の意義……………五九二

第十四章 冠辭……………五九八

第六章 言語比較の例證(二)……………六〇五

一 國、縣、郡、村……………六〇五

二 山の「ムレ」、城の「サシ」……………六〇六

三 身の成る金……………六〇七

四 天なるや……………六〇八

五 朝と夕—亞細亞と歐羅巴……………六〇九

六 朝日に「匂ふ」……………六一一

七 久方、ひちかた、日高……………六一一

八 龜の壽……………六一二

九 御目出度及び萬歲……………六一三

十 「てだれ」(熟達者)……………六一五

十一 小と大おと……………六一六

十二 血潮……………六一六

十三 穿ち……………六一七

十四 「ひるは」は「ひめもす」……………六一八

十五 更科のサラセン……………六一八

十六 天アメ……………六二〇

十七 「遠岐斯」八尺の勾瓊……………六二一

十八 「真柴の小ワッパ」……………六二一

十九 錨神話……………六二二

二十 萬燈、望月、餅、饅頭……………六二三

二十一 「小梅瓦町、奴とピッコと」……………六二四

二十二 「助六」……………六二七

二十三 酒神ヤッコスと助六と頼光……………六三二

二十四 「沖のクライノに」……………六三五

二十五 「大星由良之助」—「オーホイス」と「リラ」琴……………六三五

二十六 柘榴と謠曲、舞車、伊邪那美命、黄泉戸食、補遺……………六三六

二十七 葡萄……………六三八

二十八 銀杏と杉……………六三八

二十九 七草の語原……………六三九

三十 むっとして怒る……………六四四

三十一 百合若とユリセスの子……………六四五

三十二 演劇上の地名人名……………六四七

**第七章 風俗及び趣味上の日本と希臘との比較……………六五一**

一 日本國の名譽の爲め……………六五二

二 趣味風俗……………六五二

三 菊花紋章……………六五三

四 冠帽類……………六五五

五 婦人の頭髮……………六五六

六 あづま帽子とアテーナ帽子……………六五七

七 アテーナ女神の名義考……………六五八

八 男子の結髪……………六六〇

九 鎧の比較……………六六一

十 履物比較……………六六四

**第八章 人種學上宇和島の提供する無類の材料……………六六七**

一 宇和島提出の理由……………六六七

二 耳立つ宇和島語々原……………六七〇

三 「ブーヤレ」宇和島の祭禮其一……………六七八

四 「ヨイサ」及び「ヨウホイ」宇和島の祭禮其二……………六八三

五 「デンデコ」宇和島の祭禮其三……………六八七

六 「デンデコ」歌とヤソンの金羊物語……………六九三

七 「デンデコ」歌のボスボロス海峡……………六九六

八 「デンデコ」歌の黒海……………七〇一

九 「デンデコ」歌のダニューブ及び瑞典—キムメリ人神話……七〇六

十 「デンデコ」歌の丁抹及び獨逸……七一九

十一 「デンデコ」舞踏と西洋舞踏—スコットランドにまで……七二五

十二 宇和島とトロイとツルとの關係……七二八

十三 和靈神社はメルカルト或はヘラクレス……七三四

十四 スカンデナビアのトール、オージン、ジンゴ—神と極東日本の豊浦、應神、神功天皇……七四二

十五 餘論……七四六

第九章

言語比較の結論

七四九

挿書目次

アポロ—ン神の「おのころ」石……三五

ラーア—リオン星座圖……五五

アテ—ナ女神の「アイギス」……一〇一

アテ—ナ女神の像……一一二

ヘラクレスの九頭龍退治……一五五

ベルセウスとゴルゴンの首……一六二

ケヒウス星座圖……一六三

カシ—ベ星座圖……一六四

アンドロメダ星座圖……一六五

「プ—ヤレ」の圖……六七八

「ヨ—イサ」の圖……六八四

埃及河神の像……六八一

「デンデコ」の圖……六八八

目次終

世界的研究に基つける 日本太古史

木村鷹太郎著

總論 本書著作の由來と論述の順序

總論

日本研究の興味

世上研究すべき問題少なからずと雖「日本」の研究に優れる興味多きものに有らざる可く、又た其日本研究中、日本人種、言語及び宗教等の由來を研究するに優りて愉快なるもの他に有らざる可し。何となれば日本人の言語、神話精神及び性質等を觀るに、隣國及び其附近の夫等とは大に趣を異にし、其狀宛も古來日本人の信せし如く、全然文字通りの天降人種なるかの如

總論 本書著作の由來と論述の順序

日本の人種と言

き觀あればなり。  
然りと雖日本人は、果して、人種に於て、言語に於て又た宗教に於て、全然孤立して、世界諸人種の分類中其何れにも入るゝこと能はざるものなるか、或は餘他の諸國民の如く、尙ほ何れかの人種系統を爲せるものなるかに就ては、苟も世界的智識を有せる者の、必ず思ひ及びべき事なりとす。余は歴史家に非ず、言語學者に非ず、又た比較宗教家に非ずと雖、是等の事に關しては多大の興味を有せるものにして、其興味に至つては敢て其等専門家に譲らざるなり。

支那系統に關せず

或時不圖想起すらく、日本と支那とは同一人種——又た同一語系の國にあらずやと。何となれば日本語中には、歴史上吾人の知れる新たに入り來りし支那語以外、別に最も古くより、見事日本語的のものと成り居る所の漢語の如きものを發見せるが故なり。例せば梅(バイ—マイ—メイ—ウメ)竹(チク—タク—タケ)馬(バ—マー—ウマ)等の如き然りと。此くて余は此方針を以つて、此くの如き無數の言語は之れを集め得たりと雖、尙ほ日本に於て最も

重要なりとせる所の言語を支那語中に得ること能はず、又た其言語の性質及び文法等に於ては殆ど全然一致せざるなり。

茲に於て余は日本人と支那人とは同一人種に非ず、又た同一言語の國にも非ずと爲さざるを得ざるに至れり。然り、又た其思想に於て、主義に於て、精神に於て、日本人は支那種族と別物たり、特に宗教に於ては、全然別種たるを感せずんばあらざるなり。

果して人種及び言語に於て、支那種族と同一ならずとせば、吾人は勢他方面を研究せざる可からず。さればとて南洋如き、朝鮮如き、蒙古如きは始めより吾人民族の起源地として顧るに足らざるなり。吾人は太古の研究上、鐵道なく、船舶なく、又た陸上通路無しとするも、試みに思想の鵬翼を伸ばし或一點の光明を認めて、直ちに西方希臘羅典方面に飛揚せんか。此に於て歴史學、言語學、比較宗教學専門の蝸と鸞鳩輩とは之れを笑ふて曰く「我決起して支那と朝鮮と筑紫と、其最遠なるものにしてアイヌと南洋と印度とを搶く、時に至らずして地に控つのみ。爰ぞ希臘羅典を以つてせんや」と、今の

歴史及び言語學  
専門家の小眼界

歴史家、言語學者、比較宗教家等大抵是れのみ。  
達人は達觀す。思想は泥土を匍匐するを要せず。宜しく浮揚自在にし  
て達觀的位置に在る可し。

プラトンは希臘と日本との媒介者

余は此數年間プラトンの翻譯に従事し専ら思想を哲學及び社會國家の經綸的方面に向け、思想此以外に出づること能はざりしも、プラトインが數々引用せる所の神話が、日本の神話と殆ど同一にして、殊に吾人の歴史に於て重要な所の天照大御神は、希臘に於いても亦最も尊貴なるアテーナ女神の神話と同一なるに氣付き、其他の思想、習慣、風俗、祭禮儀式及び道義等甚しく彼我相似れる感じ、其何故に此くまで近親なる類似あるに至りしかとは、常に去らざる所の、余の心中の疑問なりき。

支那に非ず南洋に非ず

あゝ此疑問は遂に余をして日本人と希臘人との人種關係に就いて、大膽なる假定説を設みしめ、以て其れが研究に進ましめたり。余はプラトインに感謝す。

然りと雖又た謂へらく、日本と希臘——東西國を隔つること遠遠なり、決

日本希臘の交通路

して直接に相關係し得べきに非ず、或は或他國人を中介して、日本人は彼れの神話或は思想等を受け得しものならざるを保せずと。されども吾人の實際せる所の支那に於ては、毫も日本的、希臘的思想あるなし、假令多少之れ有りとするも、其發表の性質、態度、調子及び感情を異にせり。されば其等神話は決して支那人より得たるものに非るなり。之れと同時に或人々の思ふが如く、南洋人等は、決して日本人の有せる如き美麗高尚なる思想風俗等を我に與へ得るものに非ずと。

然らば日本人は之れを支那人より得しに非ず、又た南洋人より得しにも非ずとせば、如何にして日本と希臘方面とは關係を有し得べきぞ。之れ實に疑問なりき。

然りと雖一旦關係あるを假定したる上は、何等か兩人種間の交通なかる可からず。其交通果して如何ん、又た日本人は希臘方面より來りしとせば、果して如何なる道を通し來りしものぞ。

其時意へらく、大古は航海術未だ開けず、決して多大の人民を遠隔の地に

輸送するの船舶あること無かる可く、又た若し之れ有りとするも、スエス地峽の海路を遮断せるあり、船すべきに非ず。然らば日本人は海路より此地に來りしに非ずと。(是れ大に誤謬なる思想なり)

されども其交通路は兎に角にと爲し、果して日本人と希臘人とは種族上の關係之れ有るやに至つては、大に研究す可き事と爲し、先づ思想を一般、リアン語に向け、其内特に希臘羅典方面の研究に進みたり。而して結果や如何ん。曰く、余の大膽なる假定説は證明を得たるものゝ如し。乃ち――

第一神話の比較研究は、彼我全然同一にして、古事記、日本紀等の神代記は、殆ど全部希臘神話の、只だ微細なる變化を爲せるのみにして、同一神話の別傳たるを發見せり。且其等神話中なる數多固有名詞――人名地名等――の一致は吾人の立説に確乎たる基礎を與へたり。

第二言語の比較は、日本語は希臘羅典系の言語大部分を占め、之れにチュートン語其他を混有せることを知り、且つ其文法も亦希臘羅典チュートンのもの混合して、一種のものを形成せるを示めせるを發見せり。

日本語は希臘羅典系統

論

總

日本人は希臘方面より東漸せり

總

論

本書當初の目的

第二歴史地理の研究は、明かに日本民族の、小亞細亞、伊太利、希臘及び埃及方面に住居し、亞拉比亞、波斯、印度、暹羅等を其勢力範圍即ち東の國と爲し、以て大規模の東漸を爲し、を示めし、吾人をして、歴史的に日本人種の希臘羅典系なるを立論せしむるに至れり。

此くて研究其歩を進むるに従ひ前迄の光明益々増加し、眼界益々擴大し、始めは苦心慘憺、僅かに索め出だせし同一語原の希臘語は、其後は一步一步日一日容易に之れを發見し、希臘語字書及び羅典語字書を以つて、容易に日本語を引き出だし得るに至れり。

余は今回の此著の目的は専ら日本民族の希臘羅典系なるを證明せんとして、只其方便として古事記、日本書紀等を以て比較研究の標準的材料と爲さんとするにありき。是れ此日本最古の書物に對して、希臘語及び羅典語等の有せる親密不離の關係を明かにする時は、十分彼我の人種及び言語關係を示めすを得べしと思ひし故なり。

然りと雖其研究を進め行くに従ひ、始めは單に日本人種の希臘羅典系



本書三方面の性質

統のものなることを證明せんとせし範圍は、次第に擴大し來りて、遂には日本民族の歴史内容及び世界歴史との交渉に及び、一面日本太古史たり、又た一面世界太古史と日本太古史との關係史となり來り、吾人の研究は無限の膨脹を致すことゝ爲れり。然りと雖余の此著は目的此に在らざるが故に、結果は自然折中的のものとなり、(一)日本民族希臘羅典系論と(二)日本民族の太古史と(三)日本太古史と世界太古史との關係、との三性質を帯ぶるに至れり。

余は今此に古事記日本書紀等を中心と爲して立説する者なりと雖、古事記日本書紀全部の註釋を本旨とせるに非ず、只是等古書を以つて、吾人の立説上有力にして價值ある本據と爲せしのみ。若し夫れ古事記日本紀等、盡く之を論説し、註解せんとせば、到底半年一年の短日月の善くする所に非ざるなり。然りと雖今後日本研究に従事する者の新方針と新方法とは自然に此内に含蓄せられ、又た吾國典に於ける重要なる諸點は、大抵之れを説き得たりと信するなり。

本書研究論述の順序

されば吾人の研究順序は――

第一(一)神話の比較――を行ひ、此に宗教、思想、道義、儀式、習慣等彼我の同一なるを明かにし、

第二(二)言語の比較――に由りて彼我同一言語の系統なるを明かにし、

第三(三)歴史地理――の研究、即ち我が國典を本據として、日本民族は希臘羅典系たり、太古に在つて希臘羅典方面に住居し、其後埃及に移り、亞拉比亞、波斯、印度、暹羅等は我勢力範圍たり、又た東漸經過の地たるを證明し、又た極東現日本の地名國名等は、盡く其等原住地及び經過地を縮密し、移寫せしものなることを明かにし、

第四(四)結論――として余の此新發見より今後の國史、國文、國語、神社、政治、外交、世界歴史及び人類感情等に及ぼす影響と功益とを述べんと欲す。

(一)神話比較  
に就て

最も簡單なる證  
明法としての神  
話比較

最も遠く隔離せ  
る國土

## 第一編 神話比較

### 第一章 天地開闢

#### 一 神話の比較に就て

吾人は日本神話と希臘神話との比較を以つて、彼我の信仰及び思想上其  
同普通のもの有りて、人種の同一を示めす所の一方面の有力なる證據なり  
とし、又た何等複雑なる議論或は考證等の援助を藉ることなく、只だ單に彼  
我神話の物語を對照するのみにして、小兒と雖、容易に其同一點を發見し得  
る所の、最も簡單なる證明法なりと爲し、先づ第一に此方法を使用せんとす  
る者なり。

殊に最も注意すべきは、吾人の對照せんとする所の神話は、吾人の隣國た  
る支那朝鮮等に發見せざる所のものたり、又た其性質や印度的のものにも

神話比較と比較神話學とは別物

本書は神話比較を目的と爲すに非ず

非ずして、東西海陸幾千里を懸隔せる希臘羅典等の夫れと、日本の夫れとにして、而も此地理上の隔絶に關せず、其神話に至つては、相方殆同一と謂ふ可く又た非常に親密にして離る可からざる關係ある所の不思議の現象なりと爲す。

吾人はこゝに神話比較と謂ふと雖、神話學の比較研究には非るなり。かの神話其物と神話學とは性質を異にせるものにして、吾人のこゝに行はんとする所は、神話に理屈を附會するの比較研究なるものに非ずして、神話は之を其まゝに神話となし置き、以つて之れを比較し、其異同を明かにし、以つて其奥底に存せる所の人種的關係を發見せんとするものなり。

吾人此く神話を比較せんとすと言ふと雖、盡く希臘羅典等の夫れと、又た盡く日本の夫れとを比較し盡くさんとするものに非ず。されば吾人の執る所の方針は、日本に於て最も古書として取扱はるゝ所の古事記日本紀等の神話を以つて、大略之れに對比すべき彼れの神話を對照せんとするにあり。然りと雖吾人は、神話の對照、及び神話の比較研究其ものを以つて目的

比較の範圍

言語學多少の援助

と爲すに非ずして、實は吾人の所説たる所の、日本と希臘羅典關係の證明用と爲すに過ぎざるなり。

然りと雖亦吾人の比較對照は、幾何程度の能力を有し、或は如何なる範圍にまで有効なるべきかに關し、十分の有力有効なるを明かにせんが爲めに、又た相當の神話數の比較を行はざる可からざるなり。此目的に對して吾人は日本の天地開闢説より神代卷全部を以つて材料と爲し、以つて日本と希臘方面との神話の同一なるを明かにせんと欲す。

余の今此に行はんとする所の比較なるものは、専ら之を神話其物に限りて、言語學上よりする所の證明は、之を用ゐざらんとし、又た之を必要と爲さざるなり。然りと雖神話は之を神話と比較し、之に加ふるに又た言語學上の證明の援助を以つてする時は、神話比較は爲めに一層の光明を得て、結果の正確程度を増す可き如し。されば言語其物は別篇之を論すべく、又今此部分には之を必要するに非ずと雖、聊か彼我語原の共通なるを前定、夫れより得る所の光明を神話比較に投じて、以つて比較に勢力を添ふることゝ

二 高天原の神々

日本の天地開闢

編 一 第

古事記と日本書紀との對照

爲せり。

吾人の神話比較は先づ彼我の天地開闢説より始む可し。世界は如何にして成りしか。國土山川神人は如何にして生れしかに就きて、日本神話の言ふ所に據れば、別天神五代神代七代なるものありて高天原に神聖會議を組織し、其等諸神は最も若き所の伊邪那岐伊邪那美二神に命じて國土山川草木神人を生ましめ給へり。其等原始の神々に就いては古事記、日本紀其記事を異にせるが故に、今其兩書を對照する時は左の如くなる可し。

(古事記に據れば)

天地初發の時高天原に成り

ませる神は

天之御中主神

高御産巢日神

(日本書紀に據れば)

太始は天地未だ割れず渾沌たる

鷄子の如し其分化より

地天

神話の比較

神御産巢日神

此の三神は皆獨神成りまして御身を隠し給ひき。次に國稚く浮脂の如くにして久羅下那洲漂よへる時に葦牙の如く萌上れる物に因りて成りませる

神の名は

宇麻志阿斯訶備比古遲神

天之常立神

此二神も亦獨神成まして御身を隠し給ひき。以上五神は別

天神。

次に成りませる神は

國之常立神

生じ、其中に一物生ず、狀葦牙の如し、乃化して神となる是れ

國常立尊

豐雲野神

此二神も亦獨神成まして御身を隠し給ひき。次に成りませ

國狹槌尊  
豐斟淳尊  
右純男

宇比地邇神

壺土煮尊

妹須比地邇神

沙土煮尊

角杙神

妹活杙神

意富斗能地神

大戸道尊

妹大斗乃辨神

大苦邊尊

游母陀琉神

面足尊

妹阿夜詞志泥神

惶根尊

伊邪那岐神

伊弉諾尊

妹伊邪那美神

伊弉册尊

(三) オルフエウス派の天地開闢説  
希臘三種の開闢

國常立神より以下を神代七代と稱す。

以上を神代七代と稱す。

此く神々生れませり。是に天つ神諸の命以ちて伊邪那岐命、伊邪那美命二柱の神に、此漂へる國を修理なせと詔りて、天の沼矛を賜ひて言依さし賜ひき。  
余は之に對照するに希臘のオルフエウス、ヘシオドスの神話を以つてせんと欲す。

三 オルフエウス派の天地開闢説

希臘の天地開闢説を記せるものに大略三種あり。第一はホメーロス (Homeros) なり。第二はヘシオドス (Hesiodos) なり、第三はオルフエウス (Orpheus) 派の夫れなりと爲す。此最後のオルフエウスの開闢説は日本書紀開卷第一葉の天地開闢説と全然同一なるものにして、今之れを對照せば讀者必ず日本神話と希臘神話とに關して、思半に過ぐるものある可し。

日本書紀の開闢

支那書の拔萃に非ず

オルフェウスの開闢説

日本書紀は曰く「古天地未だ割す、陰陽未だ分れざりし時は、渾沌たる鶏子の如く、溟滓にして牙を含めり。其清陽なるものは薄靡して天と爲り、重濁なるものは淹滯して地と爲り、精妙の合へることは搏易にして重濁の凝れるは竭り難し。故に天先づ成りて地後に定る。然る後神聖其中に生ず」と。從來吾國の學者等は以上の開闢説を以つて支那の三五略記或は淮南子等の文にして、漢土の古傳説を拔萃し來りしものと爲し、大に之を外物視せり。然りと雖大に誤れり、是れ決して支那の書物より取り來りしに非ずして、實は吾希臘系統人種固有の古傳説にして、支那人も又其希臘方面本源の古傳説を取つて歴史の始と爲せしものなり。其本源的古傳説の希臘に傳はれるものは希臘太古の神話的人物オルフェウスの所傳たるなり。

オルフェウス宗派の言ふ所に據れば——「時は無始にして世界の太始を爲し、次に暗黒と雲霧と火氣とに覆育せられて、渾沌生ず。時は其雲霧を急速に回轉せしめて、鶏子の形態を成さしめ、次に其鶏子は二分して一部は天となり一部は地と成り、其卵子の中央より一神生ず」と。

(四)ヘシオドスの開闢説

「テオゴニー」の書

此兩記録を比較する者にして、誰か日本の開闢説を以つてオルフェウスの、夫れと同一なるを認めざるものあらんや。又た日本書紀の記載せる所は從來の國史家等が思ひし如く、決して支那の書物を拔萃して得たる思想に非ずして、始めより吾が人種固有のものなるを知り、こゝに國史の宛を雪ぐを得るなり。

#### 四 ヘシオドスの開闢説

然と雖天地開闢説及び神々の系圖の最も組織的なるはヘシオドスの『テオゴニー』(Theogony)なる書物と爲す。其言ふ所に據れば「始めに渾沌(Chaos)生じ、次に地(Gaia)及び愛(Eros)生ず、此「愛」は今後萬物發動發生の動力にして、陰陽を和合せしむる衝動者なり。「愛」渾沌に觸れて、地下の暗黒なる陰府と地上の暗黒なる夜とを生ず、夜と陰府と合して、天上の光明たる「エーテル」と地上の光明たる晝とを生めり。終りに地母は「愛」の觸るゝ所となりて星辰輝く天と高山と大海とを生めり。次にウラノス(天)とガイア(地)とは世

ウラノスとガヤとの子たる神々

(一)チタノスの神々

界一切の父母となり主宰となれりと。

ウラノスとガヤとの子には三種類あり、第一はチタノス (Titanos) なり、第二は目一箇神々 (Cyclopes) なり、第三は百手怪力神なり。乃ち――

- 大洋 (Oceanos) } 海洋に關する神々
- テチス (Tethys) }
- ヒペリオン (Hyperion) }
- テヤ (Theia) } 天體現象に關せる神々
- コイオス (Coelos) }
- フォイボス (Phoebos) }
- チタノスの神々 } 強力現象の神々
- クレイオス (Cyclos) }
- イウリピア (Eurypia) }
- ヤペトス (Iapetos) }
- ラミス (Themis) } 正義秩序の女神
- ムネモシネー (Mnemosyne) } 記憶の女神

第一編

神話の比較

(一)目一箇の神々

(二)百手怪力の神々

神世の革命

父ウラノスの神は是等一眼神と百手怪力神との怪力と醜状とを恐れて、是等諸神の生るゝや否や、直ちに之れを母なる地中に排壓して、固く之れを幽閉せり。此く排壓せられしより、母なる地は憤慨に堪えずして其復讐を企てたり。然りと雖右數多のチタノス中、クロノスのみは母なる地の命令に従ひ授けられたる銳利なる鎌を以つて父ウラノスの局所を切斷せり。其流れ出でし血に成れる神々は

目一箇神々  
 電光 (Brontes) ..... 速日神  
 雷火 (Stereos) ..... 速日神  
 雷霆 (Arges) ..... 建御雷神  
 プリアレオス (Briareus) ..... 石裂神  
 ギエス (Gyes) ..... 根裂神  
 コトス (Cottos) ..... 石筒之男神

第二神代の大神及び大神

ウラノスの血に成れる神々

流れし血の地に 復讐神 (Furies)  
着きて成れる神 巨人 (Giants)  
々々 河々の仙女 (Melian Nymph)

流れし血の海に アフロデテ (Aphrodite)  
入りて成れる神

なり。ウラノス神に就いては吾人此後何等聽く所なし。

此くてウラノスの第一神世終りてクロノスの第二神世と成れり。是より山川河海及び種々の神々生れ、クロノスとレアと婚して――

ヘスチア (Hestia) …………… 竈の女神に當る

デーメーテル (Demeter) …………… 大宜都姫に當る

ヘーラ (Hera) …………… 伊邪那美命に當る

ハーデス (Hades) …………… 黄泉神に當る

ポセイドーン (Poseidon) …………… 海神に當る

ゼウス (Zeus) …………… 伊邪那岐命に當る

等の諸神を生み給へり。然るにクロノスの神、曩に父を傷つけし如く自己

第一編

クロノス神世

クロノス神其子を呑没す

ゼウスの父に對する戦争

物質力と精神力

ゼウスの神性

も亦同一運命に遭遇すべきことを知り、生れし子は盡く之れを呑み盡くせり。然るに母なるレア之れを憂ひ最後のゼウスの生るゝに前立ち、私かにクレテー (Crete) 島に到りて安全にゼウスを生み、其地に成長するを得しめたり。ゼウス長じて祖母ガヤの援助に由りて、父クロノスの呑没せし子等は、盡く之れを吐き出し、こゝにゼウスとクロノスとの戦争となれり。

神話學に據る時は、クロノスは物質力を代表し、ゼウスは精神原理を代表し、こゝにゼウス黨はオリンポス (Olympus) 山を根據と爲し、クロノス黨はオ、トリ (Otrys) 山を根據と爲し、激戦續くこと數年、テッサリアは實に神々の修羅の巷なりき。クロノス黨の神なるテミス (正義の女神)、ムネモシネー (記憶の女神) 及びプロメーテウス (前見の神) は始めよりゼウス神に黨したり。戦争遂にゼウスの神の捷利に歸し、クロノスの神は遂に去勢せられて、世はゼウスの世と爲り、此くて秩序と法則との原理は自然の物質力に勝てりと爲す。

希臘神話に於ては、是後尙ほ種々神話ありと雖、要するにゼウス (Zeus) の

神話の比較



クロノス神の後裔

日本と希臘との神話異同

神は伊邪那岐、命に當るものにして天界第一の神となり、神々及び人間の父となり、天界、光明、雷霆の神となり給へり。  
而してクロノス系統の神々をタチン族と稱し、其後裔少なからず。又たゼウス系統の神々及び人間は繁榮し、是等の神人は希臘神話及び歴史を構成するなり。

此くの如く日本の開闢説と希臘の夫れとを對照する時は、大に相似たる所あるを發見すべしと雖、希臘に在つては、ゼウス(伊邪那岐)以前に種々多數の神々ありと雖、日本に在つては大抵の神々は伊邪那岐、神以後に生れまし、系圖の作製上多少異なるものありと雖、其大體に於て同一神話なるは、以後に記述する所に由つて自ら明かなる可しと信す。

### 五 神名の日本及び希臘對照

又た若し日本の所謂造化の神々に就て謂ふ時は、日本の神々は全然希臘の神々と同一にして、其名稱等亦全然同一なるは、余の立説を證明して、一點

(五)神名の對照  
造化神名の對照

### 神話の比較

の疑念を挿むを得ざらしむるものあるなり。今其等神名を對照せば左の如し

(日本所傳)

(希臘羅典語名)

天(鰲)

Uranos (天)

地(葦草)

Gaia (地)

天之御中主

Ameno-Momuyehi-nus (唯一藏主)

高御産巢日

Sagami-Muse (歴史)

神御産巢日

Come-Muse (歡喜)

宇麻志阿斯訶備比古遲

Omnasi-Aris-Gaie-echos (海神ポセイダンの別名、生々發生の神)

天之常立

Ameno-Ductus (Ammou-Ductus) (指導、及び言語の神、國常立神と一對)

國常立

Conductus Hermes (指導、言語の神)

豐雲野

Theo-Communis (交通、商業の神)

第一編

神漏岐、神漏美の命

宇比地邇

Urano-Hysthen (天上ノ水神)

須比智邇

Syn-Hysthen (天下の水神)

角杵

Ilvno-Kye (生産、發生の神)

活杵

El-Kye (生産、妊娠の神)

大戸道

Autos (獨立自主、又た年の神)

大斗之辨

Antonee (同上、カドモス神の女)

游母陀琉

Omodareus (相互即位、カストル、ポリデウ)

阿夜檮城(阿夜訶志古泥)

ケースー(雙生兒)

伊邪那岐

Aia Kaski (Kasygnote 姉妹)

伊邪那美

Zan-Neanikos (生々若男)

の如き結果を得るなり。又た高御産巢日神及び神御産巢日神を稱して神漏岐神漏美、命と謂ふ、是れ——

Zan-Neanis (生々若女)

Kalli-Ioge (Iagos) (言語、美辭)

神話の比較

産巢日は「ミユ

「天のは「アメ

神漏美

Kalli-ope (美聲)

たるなり。余が「産巢日」に對して Muse (ミューズ)の語を當てしは、希臘神話を知る人は直に諒承する所にして、余の立説は直に證明せらるべきなり。

又余が「天」なる神名に Amen 或は Ammon 或は Ameno なる言語を適用せしは、古事記の「隱身也」「隱り身にます」と訓し、或は「御身を隠し給へり」と訓す(の言に應ずるものなり。何となれば希臘語 Ammon とは「隠れたる者」を意味し、埃及にては Amen と謂ひ、日本の「天」と全然同一語たるを示めすものなればなり。アメン或はアンモンとは埃及に於ける第一の大神の名稱なり。(耶穌教の「アメン」は此語に出でしものゝ如し)

尙ほ神名の對照及び意義に關する説明は後に至つて試むべしと雖、今は單に名稱の對照のみに止む。何となれば尙ほ十分彼我の神話、言語、歴史、地理等を明かにせし後に非ざれば、説明甚だ困難なるが故なり。只だ名稱發音の對比のみを以てするも、彼我神名の同一なるは、十分之を認め得べきを信ず。

對照

日本神話の性質……………全然希臘的  
 古事記日本紀の開闢說……………オルフェウス、ヘシオドスの開闢說  
 日本神名……………希臘羅典語

編 一 二

神話の比較

(一)日本神話の「おのころ島」

國の中心の柱

## 第二章 おのころ島

### 一 日本神話の「おのころ島」

伊邪那岐命、伊邪那美命、天つ神の勅命を奉じて、此漂蕩へる國を造り固成んと、天沼矛あまのぬぼこを持ち、天の浮橋の上に立ちて、其沼矛を指し下して書き給へば、鹽しほ、こをろくくに書き鳴して、引き上げ給ふ時、其矛の末より垂落る鹽凝つて一島と成る。是れ淤能基呂島あぶねきり、磯取盧島いそとろなり。

二神其島に天降りまして、「此島を國の中心（書紀）と爲し、天の御柱を見立て、八尋殿を見立て給へり。

こゝに伊邪那岐命、伊邪那美命に問ひ給はく、「汝が身は如何に成れる」と。女神答へ給はく、「吾身は成り成りて成り足らざる處一處ひとところあり」と。伊邪那岐命詔り給はく、「我身は成り成りて、成り餘れる處一處あり。故に此吾身の成餘れる處を汝が身の成り合はざる處に刺し塞ぎて、國土を生み成さんと思

二神結婚

ふは如何に」と。女神答へ給はく「然か善けん」。

こゝに伊邪那岐命詔り給はく「然らば吾と汝と此の御柱を行き廻り逢ひて美斗能麻具波比爲さん」と。「みとのまぐはい」とは結婚なり。其式たるや、男神は左より旋ぐり、女神は右より旋り、行き逢ひて各々頌讚の辭を述ぶるにあり。

「あなにやし」

蛭子

此くて二神廻り逢ひ給ひし時女神先づ言ひ給はく「阿那邇夜志、愛衰登賣衰」と。後、男神言ひ給はく「阿那邇夜志、愛衰登賣衰」と。各々言ひ終りし後、伊邪那岐命、女神に向つて言ひ給はく「女人先づ言ふは宜しからず」と。然りと雖久美度に興して「夫婦契約御子蛭子 (Helicon) 即ちアポローンに當る) を生み給ひき。此御子は三年足立たず、葦船に入れて流し棄てつ。次に淡島を生み給ひき。是れ亦御子の數に入らず。

二神協議し給ひつらく「今吾生める子良しからず、天の神の御所に白す可し」と、即ち共に天に上りて天つ神の教を請ひ給へり。

天つ神、布斗麻邇 (アポローン) の神巫なり、此語、後に論ず可し) にトなはせて

布斗麻邇

(二) 海神ポセイドーンの浮島  
ヘーラ女神の嫉妬

詔り給はく「女子男子に先き立ちて言ふは良しからず。還り降りて改め言へ」と。

二神還へり降りて、更にかの天の御柱を往き廻ること前の如くし、男神先づ言ひ給ひ、女神後に言ひ給ひ、禮式を正うして、國生みの大業を始め給へり。之れに關して余はアポローンの希臘神話を想ひ出さずんばあらざるなり、即ち一は海神ポセイドーンの浮島と其支柱建立と、次にアポローンの「おのころ石」と是れなり。

### 二 海神ポセイドーンの浮島

こゝに天上に美麗なるレートー (ラトリーナ) なる女神あり。大神ゼウス之れを寵愛して、妊娠せしめ給へり。然りと雖、誘妻ヘーラ女神は嫉妬の性質にして、レートーを迫め惱まし、遂に之れを天上より逐ひ下し、又た地上の草木岩石に至るまで、一物としてレートーを庇護宿泊せしむるを許さずと、遂に命令を下し玉ひしかば、レートー女神天上天下一身を置く可き處なく、遂

ポセイドン、  
レイトーを助く

デーロスは浮島  
なりき  
キラテニス諸  
島の中心島

四本の支柱

アポロロンとア  
ルテミスとの出  
産

に海濱に至り、聲を揚げて海神ポセイドンを呼びて保護を祈願し玉へり、海の世界はヘーラ女神の管轄以外にあればなり。

海神ポセイドン、聴き憫れみて、海豚を遣はし、レイトーを其背に乗せてデーロス島に迎へ來らしめ給へり。デーロス島は元と浮島なりしと語り傳ふる所にして、希臘と小亞細亞との中間なる、アイガイ海の南方に散在せる群島中の一島なり。古代の希臘人等は、此島を以て其等群島の中心なりと思ひ、此島を中心として多くの諸島は、環状を成して散在せりと信じたり。故に是等群島を稱して、キラテニス群島と謂ひ即ち海月状の群島を意味し、デーロス島を以つて其中心と爲せり。

デーロス島此く船の如く浮島なるが故に、ポセイドンの神は、其動搖を防がんとして、四本の支柱を海底に立て、以つて動搖することなからしめ、レイトーをて安んじて此島に出産するを得しめ給へり。

月満ちてレイトー男女の雙兒を産む。男をアポロロン (Apollo) と謂ひ女をアルテミス (Artemis) と謂ふ。出産の報オリンボスなる天に傳はるや、

神話の比較

(三) アポロロンの  
臍石

地球の中心

神々皆喜び玉ひ、デーロス全島には木々に花咲き、蒼き海は日光に映して金波をたゞよはし、白鳥は島の上に、島の四周に飛び廻り、歡喜の情は天地に充ちたり。さすがに嫉妬のヘーラ女神も、亦レイトーに對する情を和げ、萬物をしてレイトーを祝福せしめ給へり。

二子美しく成長し、アポロロンは、リラ琴と弓矢とを愛し、音樂、射術、種々の技術、醫術、正義、智慧等の神となり給ひ、妹アルテミスも亦丈高く身體輕捷、水久處女にして、弓を愛し、山林に入りて善良なる動物を愛し、有害なる野獸を獵り給へば、獵の女神と呼ばれ給へり。(おのころ島埃及方面にも在れども、此こには希臘方面の神話に據る)

三 アポロロンの臍石

アポロロン或時、大神ゼウスの許に至りて、地球の中心は何處なりやを問ひ玉へり。

大神ゼウス強壯なる鷲二羽を取りて、兩者共に同一速力を有するやう訓

「オムファロス」  
石  
アトイ或はデル  
フォイの都

練を加へ人をして、之れを地球の東極と西極とに持ち行かしめ、合圖を以て一時に之れを放ちしかば、一は東を指して、一は西を指して、疾風は物かは電光の勢を以て飛びしかば、二羽は空中に衝突して地上に墮ちたり。大神ゼウス言ひ給はく、此地點こそ地球の中心なれと。是れ希臘バルナッス (Parnassos) の山腹なり。アポロイン請うて此地を得て其宮居と爲し玉はんと、鷲の落ちし所に目標の石を置き玉へり。是れ世界の中心を意味して、之れを「オムファロス (omphalos) 石」と稱す——即ち臍石なり。

アポロインの神此くてバルナッス山に宮居を定め給へり。是より前此山の洞窟にプトー(或はプトーン、或はビトーン、或はビトーン (Ruben) なる大蛇住居し人畜を害すること少なからず、又た此蛇一種神異の預言力を有せしなり。故に此地を稱してプト(或はビトーン)と謂ふ。アポロインの神此蛇を退治し、又た其預言力を承傳して、長く此宮に住み給ひ、人々亦多く來りて此附近に住して市を爲せり。其市の名を命するに當り、前きに海神ポセイドーンが海豚の背にアポロイン神の母レイトーを迎へ取り給ひしより、

(四)「おのころ」の希臘語  
從來の學者の滑



石コロオの神アポロイン  
希臘古瓶の赤畫なり

海豚即ちデルフォイ (Delphoi) を此都市の名となし、アポロインの御神は此宮に座しまして正義、光明、清淨を司り、又た其神巫を通じて非常に靈驗ある神託と預言とを出し給ふにより、神徳益々明かにして、國家民人の崇敬甚だ厚く、人民も國家も、苟も大事件あるに際しては、必ず此神の神託を願ふことゝ

成れり。其れよりプト(或はフト)或はプトーンは此地の舊名となり、デルフォイの神託は世界有名のものとなり、其神巫を「プチア (Pychia) 」と謂ふ。

#### 四 「おのころ」の希臘語

茲に於て余は問はん、「おのころ島」とは果して如何なる島ぞ、又何をか意味せると——其此島の何處に在るか、地理上の問題は、今は之れを提出せざるなり。古來國學者歴史家の註釋無數にして、或は曰く「自ら疑る島なり」「おのづから疑る」なりと。或は滑稽にも、曰

「おのころ」は希臘語「オムファロス」の訛なり

第二章 おのころ島  
三六  
く「鹽こをろく」と書き鳴して成れるより此名稱ありと。余は今暫くこゝに是等諸説を評論せざる可し。然りと雖、若しグレンアの神話と言語とを對照する時は、一種學術上靜平公正なる判斷自然に湧出するが故に、彼れを以て我に對照せんか。かのアポロンの生れたるデーロス島は、アイガイ(Aegae)多島海なるキクラデス(Cyclades)群島の中心島たること、同一アポロンの神話に於て、地球の中心として臍石を建立せりと云へること、日本神話の海月なす漂蕩へる國と、海神ボセイドーンの浮島と、其浮島の支柱と、天の御柱とを比較する時は、柱「國の中心」くらげなす「浮島」等の觀念に於て、彼我神話の十分相一致せるものあるは否む能はざる也。且つ「おのころ」なる言語の意味に至つては、古來殆ど統一せる定説あるなし。茲に於て、余は試みに此不明の言語に對して「オムファロス」(Omphalos)なる希臘語を並行せしめんか。又た「オムファロス」の語尾の「ス」を去り、平易なる發音に直ほし見る時は、吾人はこゝに「オン・ハロ」なる發音を得、<sup>ン</sup>は「ノ」となり、<sup>ハ</sup>は「コ」となり、又た「ゴ」となるは、普通の轉訛にして、毫も異しむに足らず、吾等こゝに「オノコロ」なる

(五)尚ほ他の希臘語

「みとのまぐはひ」

る言語を希臘語より得來れり。然らば「オノコロ」即ち「オムファロス」なる希臘語は何をか意味せる。曰く「臍」なり。アポロンは地球の臍石に「オムファロス」の名を與へたり。然らばアポロンの臍石は「おのころ」石たり、デーロス島は希臘神話の「おのころ」島たり、我々天の御柱なる言語中には、ボセイドーンの四本の支柱と、アポロンの臍石と、デーロス島との觀念とを含有せるものと謂ふ可く、此神話は東西地を隔つと雖、尚ほ同一根原を有し、同一空氣を呼吸せるものたるを想ふも、敢て不可なきが如し。

五 尚ほ他の希臘語——「みとのまぐ

はひ」「ふとまに」「あなにやし」

尚ほ他に注意すべき二三の希臘語は「美斗能麻具波比」「布斗麻邇」「阿那邇夜志」等と爲す。

美斗能麻具波比——とは、舊來の註釋者は、大抵「御殿にて」「味く喰ひ合ふ」とを意味せりとの解釋を爲し、殿中にて相抱擁するとなりと爲せり。其

大意に於ては誤らずと雖、尙ほ其明確なる意味は希臘を以つてすれば之れを得可し。即ち *hede-hedjua* なる語は「相共に」「一つに成らん」との二語の合せるものにして「メタ」は美登となり「メミグマイ」は能麻具波比となり、こゝに「ミトノマグハイ」なる語を生ずるなり。決して「御殿」にて「喰つ付き合ふ」と言ふが如き、本居流の亂暴野卑なる意味には非ずして、極めて平穩なる「和合」を意味し、以つて結婚を意味せるなり。

布斗麻邇——とは從來の解釋に據る時は「布斗」とは「大」即ち尊稱を意味し、「麻邇」とは、本居宣長等は「其意義未だ思ひ得ず」と言へり。是れ甚だ正直なる自白なり。然りと雖他に又た「麻邇」は「まにまに」即ち神意の「まにまに」なりなど其他種々無数の憶説を臚列する者ありと雖、當れる者一人も有なし。余は又た茲に希臘語を以つてせば、其意味の明確を得ることを言はざるを得ざるなり。是れ *phōs + mania* にして、前記「アポロンの臍石」の部参照「プロト」神社即ち「デルフォイ神社」の神託を宣言する神巫を指すものなり。故に「プロト」は「太」に非ずして「プロト」(即ち「フト」)を意味するものゝ如し。「マニ」は *mania* にし

「ふとまに」

「あなにやし」

て神の憑る所となり、預言或は神託を宣言する者にして、一種「狂」を意味とすと雖、此「マニア」なる字は、善狂にも悪狂にも使用し、善狂は預言者、天才、詩人等の意味に使用し、所謂「インスピレーション」受けし者たるなり。是れ「マニ」なり、決して神意の「まにまに」と言ふが如き、瞞着的言語を以つて説明すべき言語に非るなり。(天才と狂氣との關係及び「マニ」なる言語の説明は「プラト」ンの「ファイドロス」篇中に詳なり就て見る可し)

阿那邇夜志——とは何ぞや。素り是れ二神相互に容貌の美を稱讚し給ふことなりと雖、其の言語の眞意義に至つては、此「アナニヤシ」は必ずしも「美」を意味するに非ざるなり。*anastasis* (anastasis) なる希臘成語あり、乃ち「アナニヤシ」の發音を得可し。

而して「アナ」(ana)は、從來の解釋の如く、感嘆的「嗚呼」に非ずして、此處には「後返へる」を意味し、「ニヤシ」(niasis)は「若き」を意味して「アナニヤシ」なる熟語は「再び若かやがん」「若か返へらん」との稱讚的挨拶となるなり。日本紀には「アナニエヤ」と言へり、「アナ」は右と同じく、「ニエヤ」は *niasis* にして、「ニヤシ」と同一言



天の御柱……………  
 デーロス島中心説  
 アポロンの地球の中央觀  
 五月女王と五月棒

おのころ島……………  
 アポロンの「おのころ」石

の一形状なり。

此くて古事記の所謂「海月なす漂蕩へる國」は希臘のデーロス島の浮島なるに相對し、天の御柱即ち世界の「中心」なりとの觀念は、希臘神話に於けるアポロンの地球中心神話たる「おのころ」石に對し、又た「柱」の觀念はゼウスの四本の大理石柱に對せりと謂ふ可く。且つ「みとのまぐはひ」「ふとまに」「あな」にやし等の希臘語なるは、注意すべきことと爲す。

余の尙ほ此に一言附加すべき事は、伊邪那岐、命の「天の御柱」及び其周圍の廻轉は、西洋諸國に行はるゝ所の「五月女王」(May Queen) 及び「五月棒」(May Pole) に當るものなること是れなり。其説明は此に略す。今其類同對照表を作れば左の如くなるべし。

(日本)

海月なす漂へる國……………浮島デーロス島及びキクラデス諸島

(希臘)

ポセイドーンの四本柱

(一)二神の國  
生み—迦具  
土神の生誕

國土

### 第三章 火神迦具土

#### 一 二神の國生み—迦具土神の生誕

伊邪那岐、伊邪那美二神夫婦となりて生み給ひしは、先づ國土にして、

淡路 豫  
筑紫 岐  
壹岐 紫  
津島 岐  
佐度 島  
大倭 豊秋津島  
吉備の兒島

神々

小豆島 大島 女島 知訶島 兩兒の島  
等なり。次に重要な神々を生みませり、即ち次の如し、曰く—

大事忍男神 石土毘古神 石巢比賣神 大戸日別神 天吹男神 大屋毘古神 風木津別の忍男神 大綿津見神

編 一 終

火神迦遇突智

女神の病より生  
りし神々

次に

- 速秋津日子神 — 八子あり
- 速秋津比賣神 — 八子あり
- 志那都比古神
- 久々能智神
- 大山津見神 — 八子あり
- 鹿屋野比賣神
- 鳥の石楠船神(天の鳥船)
- 大宜都比賣神

火之夜藝速男神 — 一名火之炫毘古神 — 一名火之迦具土神(迦遇突智)

を生みませり。是れ火の神なり。此御子を生みませるに由り、伊邪那美命、美蕃登(陰部)燃かえて病み臥し給へり。

其伊邪那美命の病より生せし神々は —

神 話 の 比 較

劍と血とに成りし神

涙に成りし神々

金山毘古神  
金山毘賣神  
波邇夜須毘古神  
波邇夜須毘賣神  
彌都波能賣神  
和久産巢日神 — 此神の御子豊宇氣毘賣神

なり。然れども伊邪那美女神は遂に崩御ましませり。

伊邪那岐命悲泣働哭して曰はく「あゝ愛する我妹の命や、子の一人に易へつるかも」と。御枕方に匍匐ひ御足方に匍匐ひて哭き給ふ。其時御涙に成りませる神は香山の畝尾の木の本にます泣澤女神なり。神避まし、伊邪那美命は出雲と伯伎との堺なる比婆山に葬りまつりぬ。

是に於て伊邪那岐命の御佩かせる十拳の劍を抜きて、其御子迦具土神の御頸を斬り給ふ。其劍と血とに成りませる神々は

石裂神

編 一 第

大神の身體諸部に成れる神

根<sup>ニ</sup> 裂<sup>ク</sup>ノ神  
 石<sup>ノ</sup> 筒<sup>ノ</sup> 之<sup>ノ</sup> 男<sup>ノ</sup> 神  
 甕<sup>ノ</sup> 速<sup>ノ</sup> 日<sup>ノ</sup> 神  
 樋<sup>ノ</sup> 速<sup>ノ</sup> 日<sup>ノ</sup> 神  
 建<sup>ノ</sup> 御<sup>ノ</sup> 雷<sup>ノ</sup> 神  
 一 名 建<sup>ノ</sup> 布<sup>ノ</sup> 都<sup>ノ</sup> 神  
 關<sup>ノ</sup> 御<sup>ノ</sup> 津<sup>ノ</sup> 羽<sup>ノ</sup> 神  
 關<sup>ノ</sup> 御<sup>ノ</sup> 津<sup>ノ</sup> 加<sup>ノ</sup> 美<sup>ノ</sup> 神  
 關<sup>ノ</sup> 御<sup>ノ</sup> 津<sup>ノ</sup> 羽<sup>ノ</sup> 神  
 正<sup>ノ</sup> 鹿<sup>ノ</sup> 山<sup>ノ</sup> 津<sup>ノ</sup> 見<sup>ノ</sup> 神  
 淤<sup>ノ</sup> 藤<sup>ノ</sup> 山<sup>ノ</sup> 津<sup>ノ</sup> 見<sup>ノ</sup> 神  
 奥<sup>ノ</sup> 山<sup>ノ</sup> 津<sup>ノ</sup> 見<sup>ノ</sup> 神  
 關<sup>ノ</sup> 山<sup>ノ</sup> 津<sup>ノ</sup> 見<sup>ノ</sup> 神  
 志<sup>ノ</sup> 藝<sup>ノ</sup> 山<sup>ノ</sup> 津<sup>ノ</sup> 見<sup>ノ</sup> 神

にして迦具土神の身體諸部分に由りて成りませるは、山に關する神々にして

神 語 の 比 較

尾羽張の劍

(二)迦具土の語源説明

無見識なる印度崇拜

羽<sup>ニ</sup> 山<sup>ノ</sup> 津<sup>ノ</sup> 見<sup>ノ</sup> 神  
 原<sup>ノ</sup> 山<sup>ノ</sup> 津<sup>ノ</sup> 見<sup>ノ</sup> 神  
 戸<sup>ノ</sup> 山<sup>ノ</sup> 津<sup>ノ</sup> 見<sup>ノ</sup> 神

是れなり。其斬りる劍の名は天の尾羽張と謂とをふ。

二 迦具土の語源説明

日本の尊敬すべき比較宗教學者、博學なる言語學者、多才なるサンスクリット學者等は、日本太古の事物にして、聊か不明瞭の事件、或は難解の言語ある時は、直に梵語には云々なり、サンスクリットには此々々々なりと言ひ、其他を言ふの要なき如く、最も賢こげに言あげし玉へるは、吾人屢々經驗せる所なり。(意ふに其他の言語は、尊敬すべき彼等諸先生は決して之を知り玉はざるには非る可し。)然と雖余を以つて之を視れば、日本の太古を研究するに當つては、印度言語及び印度事物よりも尙ほ一層直接なる言語及び事物之れあるを感ずる者なり。かの迦具土神に就いて、例の賢しらなせる語學

者等は曰く「カグツチ」は梵語「火」を意味せる所の「アグニ」(Agni)と同一語なる可しと。余は果して其然るか否かは之を知らずと雖、言語の轉訛には順序あるものにして、決して末を以て本と爲す可きに非ず。只何の理由もなく、證據もなくして、日本を末と爲し、印度を本と爲すは、從來無見識なる言語學者等の爲し來りし所なり。是れ餘りに無見識にして、而も亦愛國心なきも亦甚しき所行にあらずや。印度の如きは決して世界言語の根源地に非ず。人類の本源は高天原にありとせば、印度の如きは一種僻遠の地にして、其言語は亦偏土語たるのみ。何ぞ吾等の言原を此國に求むるを要せんや。

此くて言語學者の或者等は「カグツチ」を説明するに「アグニ」を以つてせんとすと雖、「ア」と「カ」と發音同じからず只だ、「グ」一音、兩語に共通せるのみにして、只其一音の同一を以つて「アグニ」と「カグツチ」とを同一語なりと斷言せんとするが如きは早計も亦大しと謂はざる可からず。余は希臘羅典主義を以つて迦具土の語原は優に之を説明し得るを知るなり。然らば其語は如何ん。曰く希臘語「惡」を意味せる所の *κακος* を語根とせる *κακοτης* (或は *κακοτης*)

「カグツチ」は希臘語

「カコス」なる希臘語

「カynos」

「カynos」は是れなり。今若し「カコテス」の發音中「コ」は「ク」に轉じ、「テ」は「ツ」と訛る時は、此ここに「カクツス」となり語尾「ス」の「チ」に訛る時は「カクツチ」となり「ク」音は又「グ」音に濁るは普通の事にして吾人は茲に迦具土の發音を得るなり。此くて吾人は印度語「アグニ」よりも「カコテス」なる希臘語の方迦具土の發音に近きを知るなり。

然りと雖尙ほ他に「燃燒」を意味せる所の *καυσω* なる語ありて、迦具土一名炫毘古の發音に近からずとせず、又た火神として此語の方寧ろ適當せるが如くにも見ゆ。

此くて吾人は迦具土の語源を求めて *κακος* と *καυω* との二語を得たり、今や兩者何れか正當なるかを定めざるを得ざるなり。意味を以つてする時は後者「カynos」なる語は當れる如しと雖、又た然らざる如きものなきに非ず。何となれば鎮火祭の祝詞中、伊邪那美、命の言として「吾兄の命の知ろしめす上つ國に、心惡き子を生み置きぬ」とあるに由りて考ふる時は、此「心惡き」なる語は *κακος* (惡性) に當れるや明瞭にして、迦具土神の御名は「カコス」

「カコス」の語原  
當れる如し

に出でしを思はしむればなり。  
果して然らば迦具土の語源は寧ろ「カコス」なる可し。然りと雖も、思ふに此「カコス」なる語は「惡」を意味せると同時に又た「赤色」或は「燒燃」を意味せるにはあらざるかと。何となれば吾人は希臘羅典の神話に於て「カコス」或は「カクス」なる語に出でし名稱は「火」と「赤色」とに關係せるものあるを發見せるを以つてなり。されば吾人は次にカクスなる者に關する神話を述ぶべし。

### 三 カクスの赤牛神話と火との關係

カクス神話は希臘に在つては英雄の神ヘーラクレス(Heracles)神話中に包含せらる。ヘーラクレス、父は大神ゼウスなりと雖、母は英雄神ヘルセウス(Perseus)の女アルクメーネー(Alkmene)なるテーバイに住せる者なり。大神ゼウスの正妃ヘーラ女神、性甚だ嫉妬にましまして、常にヘーラクレスを惡み、或は之を殺さんと爲し、種々の事を企て給へり。然りと雖、ヘーラクレスがテーバイ國の爲めに驚く可き功業を立てしより、ヘーラの

英雄神ヘーラク  
レス

十二功業

女神遂に其私情を解き、ヘーラクレス若し十二功業なるものを成功せば、天上に不死の神と爲す可きを約し玉へり。茲に於て有名なるヘーラクレスの十二功業なるもの生ず即ち――

- (一) ネメアの獅子退治、
- (二) レルナイアの九頭龍退治、
- (三) アルカディアの野猪退治、
- (四) 怪鹿捕獲、
- (五) スチンファロスの怪鳥退治、
- (六) エリスの猛牛廐舎の洗掃、
- (七) クレーターの猛牛の捕獲、
- (八) テオメーデーアの喰人馬捕獲、
- (九) 女國王ヒッポリテアの玉帶奪取、
- (十) デーリクティオンの赤牛奪取、
- (十一) ヘスペリデーアの林檎奪取、

カクスの神話と赤牛

(十二)黄泉神の一身三頭犬の奪取、  
 等なり。余の今此處に言はんとする所は、其第十番、即ちゲーリュオン (Geryon) の赤牛奪取に關係せるものなり。ゲーリュオンとは世界の極西日没地なるエリテア (Erythea) 赤色なる神話上の一島に住し、三個の人間を一人に合體したる怪物にして、三體六臂六足、三對の羽翼を有し、數頭の巨大なる赤牛を秘藏せり。彼れ強力絶倫なりと雖、ヘーラクレスに敵する能はず、遂に其の斃す所となる。秘藏の赤牛はヘーラクレス之を牽きて希臘方面に向つて歸へる。途ガリア(ゴール)及びアルプス地方に於ては、種々の敵人の反對を被れり。其ローマに至るや、こゝにカクス (Cacus) なる獵師にして、又た山住の強力漢あり。或時竊かに其の數頭を盗みしも、足跡に由りて隱匿所の探知せられんことを恐れ、牛尾を取つて後方に牽き行き、之を自己の穴居に匿くしたり。ヘーラクレス此詐術に欺かれて牛の行衛を知り得ざりしが、殘餘の牛を驅りてカクスの洞窟の前を通過する時、内部の牛は聲を放ちて鳴きしかば、ヘーラクレス其失ひし牛の所在を知り、直ちに

日本語「柿」と「カクス」

猿蟹合戦はサルモネウス神話に出づ

カクスを殺し、牽き歸りし牛は之をヘーラ女神に奉獻せり。(此赤牛神話は、余の郷里宇和島にては牛鬼(おしだ)或は「ブーヤレ」として諸祭禮の出しものとして今尚ほ行はる。委しくは後編言語比較の末部「宇和島」を記する章を見るべし。)吾人は此神話に於てカクスと Erythea なる赤色地と、又赤牛との關係を見るものなり。而して其赤色は希臘神話學者の齊しく以つて日没時の赤色或は火の色の記號として扱へるに見る時は、カクスなる語は、前述の如く「惡」を意味すると同時に又た「赤色」「火色」或は「燒燃」を意味せるにあらざるかとも思はるゝなり。日本の柿の實の熟せし色は、亦これ赤色にして其之を「カキ」(Kaki) と謂ふは Cacus の赤色を意味せるありて其名稱を得たるにはあらざるか。希臘語之を diospyros と謂ひ「神火」或は「發熱」を意味す。此に於て日本の柿なる名稱は、ディオスピロス即ち希臘語の神火に當り、こゝにカクスなる言語中に又た火及び赤色の意味あるを推知するを得るなり。かの古來有名なる猿蟹合戦なる童話はサルモネウス (Salmonus) なる神の「神火模擬」の神話に基づくものにして、又た以つて「カクス」なる名稱は「カキ」

と同一たり又た火の意味を有せるを示めし、迦具土の語源を「カクス」或は「カクス」に定むることを得しむるなり。然りローマに於けるカクス神話は、又一種の火神として表はさるゝは之を證明するなり。

### 四 天の尾羽張の劍とチーアリオンの神話

希臘の天文神話に「チーアリオオン」(Orion)或は「Orion」なる獵師あり。彼れ海神ポセイドーンの子にして、強力なる巨人なり。島より島に移り行き、能く朔風に大石巨岩を投げ、飛ばし、又た諸所の山に有力なる獵師なり。然りと雖亦美男子にして、朝の女神アオス(Aus)即ちアサ(此美麗なる青年獵師を愛し、連れ行きて夫と爲す。然りと雖獵の女神アルテミス)の怒を招き其殺し給ふ所と爲り、後天に上げられて星坐となり、曙光の神と爲れり。此「チーアリオオン」は希臘曆には最も重要な一星坐の名稱たるなり。今此「チーアリオオン」の星坐の圖を見るに、彼れ左手に獸皮を捧げ右手棒を

(四)天の尾羽張の劍とチーアリオンの神話

チーアリオンの星坐圖

「チーアリオオン」は「尾羽張」なり

持ち腰に帶し、直劍を前に横ふの形なり。

此に於て余は謂へらく、伊邪那岐命が迦具土命を斬り給ひし所の天の尾羽張なる劍の名稱は、此星坐「チーアリオオン」の帶ぶる所の直劍ならんと。何となれば此「チーアリオオン」は其語尾「オン」を落す時は「チーアリ」となる可く、「チーアリ」と「チーハ」リ「尾羽張」とは同一語の別發音たるや容易に之を認め得可ければなり。天の尾羽張の劍一名「伊都」の尾羽張劍と謂ふ。今若しこゝに希臘語的解釋を試



星坐「チーアリオオン」  
(劍に當る尾羽張の威稜)

み得べしとせば「伊都」嚴とは「Ithys」にして「直き」ことを意味し、「チーアリオオン」の帶ぶる所の劍の直刀なるは、明かにこれ「伊都」の尾羽張劍たるを示すものなり。



又尾張なり

又若し「ヲアリ」を縮めて發音する時は是れ「ヲアリ」にして、日本に於ける「尾張」なる名稱に當るものに非すとせんや。然り是れ尾張なり、寶劍は尾張の國に祭りあるに由つても之を知るべし。今發音比較を圖表と爲す時は左の如くなる可し

(日)	尾羽張		Oahari
	尾張		
(希)	$\omega\alpha\alpha\alpha\alpha\alpha\alpha$	= Oh-ari(ou)	

此くて日本の迦具土神話は、希臘に在つてはカクス神話とヲリオン神話との二個に分れて傳はり、一は以つてカクスの名稱に迦具土の神名を傳へ、他はヲリオンの名稱と其星座圖に於て、伊都の尾羽張の劍名を傳へ、是等兩神話を合併せば、吾人は稍迦具土神話を得るものゝ如し。

### 五 迦具土、命と、迦久、神とカクスと

此て伊那那岐命は伊都、尾羽張、劍を以つて迦具土、命を斬り給へり。然と

(五) 迦具土、命と、迦久、神とカクスと

迦具土神と迦久神とは同一神なり

同一神の二傳

(六) ウラノス神の血  
血より神々成るの神話

雖此後古事記大國主、神の段に於て、天、迦久、神なる神あり。天照大御神の勅を奉じて、天、尾羽張神、許に使者となり、其強力を以て使命を全ふせる神なり。此神や行事は何等カクスに比較すべきものなしと雖、其名の「カク」に於て兩神同一たるなり。希臘羅馬方面に於てはカクスは悪性悪人として傳はれりと雖、日本所傳の同名の神は、有力有功の神たるなり。さらばカクス神話に於ては、彼國に傳はらざる部分は日本に傳はれりと謂ふ可きなり。  
其迦具土、神は尾羽張、劍もて斬られ給ひ、迦久、神は尾羽張、神の許に使者と爲り給ふの關係も、其神名の同一なるより考ふる時は、迦久土、神と迦久、神とは同一神の二傳と見て當然なるが如し。

### 六 ウラノス神の血

迦具土、神の血より數多の神々成りましたは古事記の謂へる所にして、吾人をしてウラノスの神の血より神々の成り給ひし希臘神話を想はしむるなり。

ウラノス神の血より神々生る

希臘神話に於ける第一神代に在つては、ウラノス(Uranos)とは天を意味せる神にましましき。ガヤ(Gaia)即ち地と婚して數多の御子を産みませり。其御子には自ら三種類ありて、第一はチタン族なり、第二は、キクローペス族なり、第三は百手の巨人族にして、是等後者の二種族(キクローペス及び百手の巨人)は、前章に述べし如く、ウラノスの神惡み恐れて、其生るゝや否や、直に之れを地下に押し込みて幽閉し給へり。

是に於て母なる地は之れを怨み、其子クロノス(時間)に授くるに敏鎌を以つてし、又た策略を與へてウラノスに復讐せしむ。ウラノス其鎌を以つて父の某局所を切り落し、かば、其血化して。

復讐の三怪女神

巨人族……………土地より生れしもの

河々の仙女等

愛の女神アフロデター……………海より生れしもの

生り出でませり。

(七)「美蕃登」の希臘語

從來の解釋の誤

古事記の巧妙なる説明

神々の名稱彼我異れりと雖、其血より神々成り出でませりとの神話に至つては、彼我全く同一神話に基づけるを知るなり。又若し伊邪那岐、命の行動より成り出でまし、神々を以つて、言語上の解説に依りて、ウラノスの神より出でし神々に比較する時は、一層明かに是等彼我の神話及び神々の同一なるを證するを得べしと雖、此には之を略し置かん。

### 七 「美蕃登」の希臘語

古事記の此部分の神話に於て、又た古來有名なる一古語を「美蕃登」と爲す。人皆な微笑を以つて此語を迎ふ。然りと雖請ふ靜かに余の説明に耳を借せ。然らば美蕃登とは如何なる言語なるべき。本居宣長は曰く「含處なり、頬の物を含む如く、ほゝまる」「ほゝ笑む」「ふほごもり」と云ふが如く、物を含む個所を云ふなり。「美」は敬語なり即ち女子の陰部なりと。結論は素より然りと雖、其の説明は當らざるなり。甚だ當らざるなり。吾人は「美蕃登」の語に

希臘の神話

由つて、實に古事記が最も巧妙に希臘語解を傳へ居るを發見して、感歎措かざる者なり。「ミ」は美稱なり「ホト」とは希臘の *ποθος* (ポトス) 即ちホトにして、『古事記』の二神が「吾身は成り成りて成り足らざる處」成り成りて成り餘れる處」と言ひ給へる所の、是等の言語は、直ちに以つて「ホト」の定解に充つ可きなり。足らざる處は足らんことを欲し、餘れる處は與へんことを欲す。此欲望之れ「ホト」なり、又た戀愛と謂ふ。其古事記の愉快なる言語は、希臘語の字引學者も亦以つて直ち此語の説明に使用せる所なり。今此語に對する英語の説明を引用せば、「desire for what is absent or lost, "fond desire or regret," "a yearning after," "longing for thee," "love" 等にして、『有る可きものにして無く、或は失ひしものに對する欲望』これが望むこと」或は『戀愛』と云ふ可きものにして、含み處、或は含みし形などの如き、本居流の説明の淺薄野卑なる言語に非ざるなり。

諸神話比較

此くて余は迦具土の神話には、カクスとラーアリオンの神話の混交し、迦久神は又たラーアリオンに關聯して、遙かに迦具土に關係を有し、火と赤

神話の比較

牛」と「カグ」と「カク」と發音相通じ、尾羽張と「ラーアリ」との音相同しく、又た「劍」に關係あるとに由つて之れを觀れば、吾人亦是等神話の根本地下に、共通のものあるを認めざるを得ざる者なり。

(日本)

(希臘)

- |        |          |
|--------|----------|
| 火神迦具土  | カクスの赤牛神話 |
| 迦久神    | ラーアリオンの劍 |
| 尾羽張、劍  | ウラノス神の血  |
| 迦具土神、血 | 登        |
| 蕃      | 希臘語      |

### 第四章 伊邪那岐命の黄泉

#### 國行き

##### 一 伊邪那岐ノ命の黄泉國行き

(一)伊邪那岐命の黄泉國行

男神黄泉國に至り給ふ

伊邪那美女神は、火神を生み給ひしに由て崩御しませり。伊邪那岐命、其妹伊邪那美命を相見んと欲して、黄泉國に追ひ往き給ふ。時に伊邪那岐命、戸の外より語り給はく「愛しき我妹の命、吾と汝と作りし國、未だ全く作り竟へず、請ふ還へり來ませ」と。

邪伊那美命答へ給はく「悔しいかな、速く來ませりき。吾は既に黄泉國食せり(黄泉國の物を食へりとのこと)。然りと雖、愛しき我兄の命の入り來ませる事かしければ、再び上國に歸へる可し。先づ具らに黄泉神と相論はん。我を見給ふこと勿れ」と。此く言ひて殿内に入りませり。

女神の黄泉國食

伊邪那美命の條

黄泉の不潔

男神黄泉より逃げ歸り給ふ

葡萄蔓

箭

桃の實「おほかむすむし」

時甚だ久しかりければ、伊邪那岐命待ち兼ね給ひて、髪に刺し玉へる櫛の男柱一つ取り闕ぎて、一つ火燭して入り見ます時に、蛆たかり、濃とろゝき流れて、頭には大雷、胸には火雷、腹には黒雷、陰には拆雷、左の手には若雷、右の手には土雷、左の足には鳴雷、右の足には伏雷——并せて八種の雷居りき。伊邪那岐命、其不潔なるに驚きて逃げ歸ります時、伊邪那美命「吾に辱見せ給へり」と言ひ、黄泉醜女を遣はして追はしめ給へり。

茲に於て伊邪那岐命、黒御鬘を取りて投げ棄て給ひしかば、乃ち葡萄蔓(葡萄蔓)の實生りき。醜女等之れを探り食ふ間に逃げ行きますを、彼等尙ほ追ひしかば、又た其右の髪に刺し給へる櫛を引き闕いて投げ棄て給へば、乃ち箭生りき。是れを抜き食ふ間に逃げ行きますせり。伊邪那美女神、後には、かの八種の雷神に副ふるに千五百の黄泉軍を副へて追はしめ給へり。

伊邪那岐命、十拳の劔を抜きて、後方に打ち振りつゝ逃げませるを、猶ほ追ひて黄泉比阪の阪本に到る時、其阪本なる桃の實三つ取りて待ち撃ち給ひしかば、悉く逃げ返へりき。こゝに伊邪那岐命、桃に詔り給はく「汝吾を助け

し如く、葦原の中つ國に有らゆる顯蒼生の憂き瀬に落ちて苦しむ時に、助け  
てよ」と告げ給ひて「おほかむむの命」と名を賜へり。

最後に伊邪那美命身自ら追來ませり。乃ち千引の石を其黄泉比良阪に  
引き塞へて、其石の中に置きて、「ことと離縁の誓を渡し給へり。

伊邪那美命を黄泉大神と謂ひ、又た其追しきしに由りて道敷の大神とも  
謂ふ。其所謂黄泉比良阪は、今出雲の伊賦夜阪と謂ふ。

### 二 オルフエウスの黄泉國行き

伊邪那岐命の黄泉行きの神話は、數多の並行神話をグレンシアの夫れに有  
し、其等種々の結合が伊邪那岐命の黄泉神話を構成せるものゝ如し。余は  
先づオルフエウスの神話より始めんか。

オルフエウス(Orpheus)はアポロンの神の子にして、グレンシア音楽の祖な  
りと稱す。其リラ琴に巧妙なるや、生ある者も生なきものも、感動せざるな  
く、其森林中に琴を奏づるや無心の木石も舞ひ、踏り、禽鳥も音を止めて聴き

離縁

(二) オルフエウスの黄泉行き

樂師オルフエウス

妻エウリヂケイの妖死

オルフエウス生きながら黄泉國に至る

妻を上界に連れ歸る條件

入りぬ。彼れ青葉茂りて、泉水澄み流るゝ、ミューズ(Muses)の森に在りて、こゝに神秘の感興を受け、又た「ミューズ」の神々に祭司となりて、妻エウリヂケイ(Eurydice)と樂しき月日を送り居たり。然るに其妻或時外出して毒蛇の噛む所となり、爲めに死して家に歸らず。オルフエウス其久しく歸らざるを異し、種々に搜索を試むれども其効なし。遂に意を決して黄泉國に至らんとし、身は生きながら黄泉に通ずるタイナロス(Tainaros)の岬角の一洞穴より黄泉國に下れり。彼れ數多の幽霊の前を通過し遂に黄泉大神ブルトーン(Berthton)に面會し、琴に合はせて悲哀の情を述べ、再び妻を地上に歸へし給はんことを願ふ。其かなざる琴の巧妙優美なる、幽霊達も皆涙を流し、黄泉大神も、爲めに説得せられて、再び妻を地上に伴ひ歸ることを許せり。されども一の條件あり、即ちオルフエウスが妻を伴ひ歸へる途すがら「其上界に出づるまでは決して後方を見て妻を見る可からず」とのこと即ち是れなり。之れ容易の如くにして至難の事なり。オルフエウス此くて妻を伴ひ上界に出立す。されども妻果して後方より來れるや否やを思ひ、ふと後方を顧みた

條件を破る

り。あゝ是れ不運、ブルトーンの神に誓ひしことは破れたり。妻は其手を前に差し伸べて、霧の如く、闇黒中に消え失せつゝ、「運命の神妾を呼び廻へし玉へり、さらばよ、オルフェウス」との怨の聲は、物すさまじく、黄泉國の寂莫中に、いとも微かにひびき去れり。オルフェウス再びこゝに妻に別れ、悄然として上界に歸り來れり。されば曩きに樂しかりし歌も之が爲めに聞こえずなり、美しかりし琴の音も、樹の間に今はひびかずなれり。オルフェウスの墓はオリュンポス山の陰、葡萄の蔓生ひ茂げれる丘上に在りしと謂ふ(此神話此後、大國主、神が須佐之男、命を根之堅州國に訪問し給ふ時の事にも關係あり一言注意を促がし置くなり)

吾人が此神話に於て特に感ずる所は、伊邪那美、命が、上界に出でんが爲めに黄泉神に論らはんと、ひ給ふは、オルフェウスが音楽を以つて黄泉神を説きしに等しく、伊邪那美、命が暫く待ち玉へ、我を見給ふこと勿れとの要求は、黄泉神がオルフェウスに向つて、決して後を顧ること勿れ、との條件を命じ給ひしに等しと謂ふ可く、彼我神話の呼吸は互に相通へることは説明を待た

(三)プロセルピナの黄泉戸食

戀愛神の戯れ

御食部大女神の國

ずして自ら明瞭なる可し。雖りと雖、尙ほ一層顯著なることは黄泉食よつへぐひに関する彼我神話の一致なりとす。

### 三 プロセルピナの黄泉戸食

黄泉の大神ブルトーン(前述)時々黄金の事車に乘じ、四頭の黒馬に之れを牽かせて地上を巡廻し給ふ。一日愛の女神アフロデテー(Aphrodite) 幼児エロース(愛)と共にありて、此光景を見て、其子に向つて詔り給く、「汝の矢は能く一切のものを征服して、之を戀愛に狂せしめ、天上の大神ゼウスの如きすらも既に汝の矢に敵する能はざりき。汝、かの黄泉國の大神に一矢を試み、以つて汝の矢を侮る所のケレース(Ceres)の女プロセルピナ(Proserpina)を此大神に合はせ見よ」と。茲に於てエロース選りに選りたる矢を取出だし、正しく之れブルトーンの胸に中てぬ。

茲にシ、リア島のエンナ(Enna)の籐樹立の間に湖水ありて、明鏡を開くが如く、牧場には緑草茂りて紅白花美しく咲き重み、鳥は來鳴き、羊は戯れ、永

其女プロセルピ

黄泉神プロセル  
ピナを強奪し給

母神の悲歎

久の春は此地を支配せり。是れ女神ケレース(Ceres)の棲みます所にして、女神は穀物野菜を保護し、動物等を愛育し、實に御食津の神と仰がれ玉へり。女神の女にプロセルピナ(Proserpina)なる美人あり。一日友等と共に野邊に立出で香もかぐはしき葦を摘み、色美しきヒヤシンスを取り、百合の花を手折り、菖蒲を取り、母なる神に家づとにと、尙ほ又た水仙をも掘り取らんと、いと楽しく、いと無邪氣に遊び居給ひし折しも、大地鳴動して一大洞穴生じ、黒色の騮馬に引かせたる黄金の車に乗れる黄泉大神現はれ給ひ、突然プロセルピナを抱き上げ、車に乗せて黄泉國に急ぎ給へば、プロセルピナは聲を揚げて救を呼べども、友等の姿も見へばこそ。助くる者も有らざりき。

母なるケレース御神は、プロセルピナの聲を知るべに、大に急ぎ馳せ來給ひしも、愛女の姿も影もなし。ケレースは狂氣の如く、朝より夕に至るまで東に西に北に南に尋ねさまよひ、道の神ヘカテー(Hecate)に聞き給へども知らずと言へり。日神ヘリオス(Helios)之れを知りて、ケレースの愛女は

プロセルピナの  
黄泉食—石榴の  
實

四季の由来

黄泉大神の奪ひ玉へる由を告げ給ひしかば、ケレースの神、失望落膽限なく、是より野も山も保護の神を失ひ、愛育する者も無く、荒れに荒れて物すさまじく不作飢饉となりけり。

天上の大神ゼウス、此有様を見て憂ひ給ひ、ヘルメースの神を黄泉國に遣はし、プルトーンの神を説諭して、プロセルピナをケレースの神に返へさしめ給ふ。プルトーンの神承諾し、給ひしと雖、プロセルピナの上界に出立する時、黄泉に生りし石榴を與へ給ひしかば、プロセルピナ何心なく、其數粒を取りて、其汁を吸ひ給へり。あゝ是れ黄泉神の詭計なりき。伊邪那美命の「よもつへぐひ」なりき。一度黄泉の物を食する時は、遂に黄泉國の者たざらる可からざる運命の定めなりき。されども調停は整ひたり。即ちプロセルピナ一年中の八個月は地上に留まり、殘餘四個月は黄泉に住することゝ爲し、此くてヘルメースに導かれて上界に至り給へり。

ケレースの神大に喜び、是より再び山林田野を愛護し給ひしかば、野も山も、花も木も、鳥も羊も、亦喜びて榮えたり。

黄泉大女神

(四)オヂュセウス黄泉より遁れ還る

一年の時節中、かの春夏はプロセルピナの黄泉より歸り給ひし歡喜を表はして萬物生々繁茂すと雖、秋は再び黄泉に行く可き豫想の悲哀あり、冬はプロセルピナ黄泉に居ますが爲めに、ケレースの悲哀寂寥を示めずものとして——四季の由來は是れなりとぞ。  
是よりプロセルピナを黄泉大女神と謂ひ爲せり。(ケレースはローマの神名にして食物、穀類の神を意味し、グレシアのデーメーテール(Demeter)に當り、土地なる母を意味し、日本の大宜都姫神に當れり)宜は希臘語にして土地を意味す)プロセルピナはグレシアにては又たペルセフォネー(Persephone)と謂ふ。

日本書紀が伊邪那美女神を謂ふて「紀伊國熊野の有馬村に祭る。土俗此神の魂を祭るには、花の時には花を以つて祭る」と言へるは、ケレースの神にも、プロセルピナの神にも、何れに向くも最も當れる事と謂ふ可し。

#### 四 オヂュセウス黄泉國より遁れ歸る

生きながら黄泉國に至りし數人

オヂュセウス黄泉に至る陰鬱不潔

伊邪那岐命が黄泉國の不潔に驚きて遁げ還り給ふの狀は、ホメーロスのオヂュセウスが黄泉國より遁げ還ると同一たるなり。希臘神話に於いて生けるがまゝに黄泉國に行きて歸り來りし者少なからず。前述オルフェウスの黄泉國に至りしと、英雄テーセウスの朋友なるペイリトールオスがプロセルピナを奪ひ還へさんとして黄泉國に行きしとの傳説と、ヘーラクレースが黄泉國の一體三頭の犬を捕獲せんとして行きしと、オヂュセウスが黄泉國に至りて種々の光景を觀來りしと、後代ローマ詩人ギルギリウスがホメーロスのオヂュセウスを模擬してイネアス(Aeneas)の黄泉行なるものを仕組たる等即ち是れなり。其内オヂュセウス(Odysseus)の夫れは、伊邪那岐命の夫れと關係あるを以てこゝに之れを略述せん。

オヂュセウスは、トロヤ(Troya)戦争中、グレシア軍の一勇將なり。トロヤ域陥りて諸將國に歸るや、オヂュセウスは道に迷ひ、諸方に遍歴して黄泉國に至る。其黄泉國たるや、闇黒陰鬱、悽愴、不潔なる所にして、影の如き幽靈諸所に飛び或は群がり、或は叫び、過去の英雄あり、美人ありと雖も、皆、顔色蒼白



一點の血色なく、幽鬱不愉快の容貌を呈し、死氣陰々たり。英雄アヒレウスの如きも、死界の王たらんよりも、假令人の奴隸たらんとも、地上光明の世界に在らんことを欲する由を語り、又た數多の幽靈の物すさまじき姿と、耳をつんざき、黄泉國のいや極までも響かんばかりの叫喚等に、オヂラセウス愈々恐れ、今や其光景に堪え兼ね、又た、ゴルゴンの頭の出現せざるの前に、速く此國を出でんものと、刀を打振り、漸くにして上界に出でたりと。其間黒と、不潔と、悽愴なるとは、伊邪那岐命の行きました、所の、黄泉國と異なることなし。

### 五 黄泉醜女とヨウメニデーヌ

(五)黄泉醜女  
とヨウメニ  
デーヌ—「ヨ  
ミ」(黄泉)の  
希臘語

#### 「ヨミ」(黄泉)の希臘語

アマゾンに非ず

伊邪那岐命の黄泉國より遁げ還り給ふ時、伊邪那美命、黄泉醜女を遣はして追はしめ給へり。然らば此黄泉醜女とは如何なる女性なるべきぞ。余は始に意へらく、是そアマゾン女軍を謂へるものならんと。然りと雖尚ほ

ヨウメニデーヌ

伊邪那岐命と  
ヨウメニデーヌ

「ヨミ」と「ヨウ  
メ」

熟考を重ねるに及びて、其アマゾンに非ずして黄泉の女靈ヨメニデーヌ(或はエリン子、或はフリア (Eumenides, Erinyes, Furies) なるを知り得たり。ヨウメニデーヌとは黄泉國の一種の女神にして、人間行爲の賞罰を司り、特に家族に關する流血の罪を復讐するを以て有名なり。其神話はオレステウス事件を以つて顯着なること、爲す(歴史地理の部本牟知王の部を見よ)。されば此女神は其罪惡を復讐したるまでは、厭くまでも其人を追跡して決して免るすこと無し。

伊邪那岐命は其御子迦具土神を斬り給へり。家族的流血の刑罰を司る所の因業の女神は、此不當の行爲に對して因業の理を以つて追窮すること、は、古事記伊邪那岐命の追窮として傳はりしもの、如し。古事記は素より男神が伊邪那美命に對する約束を守らずして、竊かに伺ひ見給ひしを怒り給ひしに原因するが如く傳ふと雖、實はこれ明かにヨウメニデーヌ的因業追窮と見て誤なきが如し。

且つ「ヨモツシコメ」(黄泉醜女)の名稱は、ヨウメニデー(即ちヨウメノ族)の發

サンスクリット語に非ず

音に近きを見よ。其考證に至つては、吾人は此に「ヨミ」黄泉の國に於て希臘語的説明を加ふるの許可を得ざる可からざるなり。

或は例のサンスクリット學者は、Yama Yami等の印度語を持ち來りて「ヨミ」の國の語源と爲す者あるやも知れずと雖、余の見る所を以つてすれば、然らざるものゝ如し。余はヨウメニデースの語に導かれて「ヨミ」の國はヨウメニデースの國即ち「親切」「幸福」を意味する所の *Yiminos* の語に出でし名稱と爲す。即ち「ヨミノス」は「ヨミノ」國と成るべく、又た希臘神話は、明かに此語の黄泉國關係の語なることを吾人に告ぐるなり。「近江」の國名「石見」の國名も實は「ヨミ」の國を意味せる語にして *Yiminos* は「近江のや」となりしものゝ如し。

次に「醜女」とは、意ふに希臘語 *aiykos* 「悪性」を意味せる言語なるべく、即ち黄泉醜女とは、黄泉國悪性女にして、厭くまでも「附きまとふ」との、ヨウメニデースの性質に符合せりと謂ふべし。實に黄泉國はヨウメニデースの國たり、又た酒神バックスの國たり、陰鬱なるべき國たると同時に、又た幸福親切の國なりとの思想は、其説明複雑神秘にして、到底希臘神話を知らざる者の了解し

「醜女」の希臘語

(六)アタラントーの林檎

アタラントー

得ざる所なり。請ふヨウメニデースは黄泉國の刑罰因業の女神たると同時に又た「親切」を意味する名稱あると、酒神バックスが快活なる酒神たると同時に又た黄泉及び土地に屬する神たると、極樂は死後にありとの思想とを綜合して考究せば、幾分かは之を知るを得べけんか。此以上は各自直接の希臘神話の研究に譲ることゝと爲さん。

余は只此にヨウメニデースの罪人の追窮と、伊邪那岐神の黄泉醜女に追はれ給へることゝの同一神話に出づるものなるを示し、又た「ヨモツ」醜女即ち「ヨミ」の國の醜女の、ヨウメニデースと言語名稱を同うせるを言ひ置くのみ。

### 六 アタラントーの林檎

伊邪那美、命の黄泉國より遁げ歸ります時、桃の實を投げ給ひし神話は、吾人をして、アタラントーの林檎を想はしむるなり。

アタラントー (Atlante) はアタマス (Atlas) の子スコイネウス (Schoeneus)

結婚條件

なるものゝ女にして、頗る美人なり。射術を善くし其疾走するや人々及ぶ者なく、常に山林に入りて野獸を獵れり。されば近隣の青年大に戀着して婚を求むと雖も其意なく、只だ餘りに諸方よりの懇請を煩はしとなし、一日人々に向つて言ふて曰く「妾と競争して勝ち給はん男子は妾の夫たる可し、敗を取り給ひし者は死せざる可からず」と。人々之れが爲めに皆避易す。一人メイラニオンなる絶世の美少年あり、戀愛の女神アフロヂテーの智と、黄金の光輝ある林檎とを得てアタランテーに競走を申込みたり。彼れ素より普通の方法を以つてアタランテーに勝ち得ざるや明かなり。競争は生まれり、メイラニオン矢よりも早く先づ驅出だせり。アタランテー忽にして追及せんとするや、メイラニオン、愛の女神の教示に従ひ、預ねて用意せる林檎を後方に擲ちたり。アタランテー見て以つて美なりと爲し、拾ひ取るに時間を費やせしが爲めに、メイラニオンは其間に數十歩を進みたり。然りと雖アタランテーに取つては、其等の距離は物かは、又た忽ちに之れに追及せしかば、メイラニオン又た林檎を投じ、此くすること前後

競争の林檎

第一編

神話の比較

三回メイラニオン辛うじて勝を得たり、——アタランテー素よりメイラニオンの美を愛して勝を譲りしなり。  
伊邪那岐、命の桃とアタランテーの林檎とは異れりと雖、其計略や同一なりと謂ふ可し。

以上伊邪那岐、命の黄泉國神話と、希臘の諸神話とを對照するに、伊邪那岐、伊邪那美二神の愛情と、女神の崩御とはオルフェウス夫妻と、妻の死とに相同じく、黄泉行き、彼我相同じく、伊邪那美、命の「黄泉神とあげつらはん」との言はオルフェウスが音楽を以て黄泉神を説得したるに同じく、伊邪那美、命が「暫く見給ふ勿れ」との約束はオルフェウスが其妻を上界に連れ出だす時、後方を見る勿れとの命令に相當し、兩者共に其約を破り、命令に背くや一たり。兩者の絶縁亦た一なり。伊邪那美、命の「黄泉竈食」はプロセルピナの黄泉國の柘榴を味ひしに、當れり。黄泉國の不潔なると闇黒なると、悽愴なるとを感せるは、伊邪那岐、命とオチラセウスの態度相同じく、黄泉醜女の追窮は、ヨウメニデースの所行に同じく、「ヨミ」の國とは希臘語たり、伊邪那岐、命の黄泉より

黄泉醜女……………ヨウメニデース  
 追迫猶豫策の桃の實……………アタランテーの林檎  
 「よみ」の國……………希臘語

遁れ出で給ふ時の桃の實の計略は、アタランテーの林檎に當れる等皆是れ同一根源なるを證明して餘あるものと謂ふ可し。乃ち之を對照せば左の如し。

類同點對照

(日本) (希臘、ローマ)

二神の愛情……………オルフェウス夫婦の愛情  
 伊邪那美命の崩御……………オルフェウス妻の死  
 黄泉國行き……………黄泉國行き  
 女神の黄泉神說得……………オルフェウスの黄泉神說得  
 暫時「見る勿れ」の約……………「後方見る勿れ」の命令  
 破約……………背命  
 不和絶縁……………絶望  
 黄泉竈食……………黄泉國の柘榴  
 黄泉國の不潔……………オチニセウスの同感

# 第五章 伊邪那岐命の禊祓

## 一 伊邪那岐命の禊祓

(一)伊邪那岐命の禊祓  
黄泉の不潔  
穢より生れし神々

是に於て伊邪那岐命詔り給はく「吾は伊邪志許米志許米岐穢き國に到りて在りけり」と。其穢惡を濯ぎ給はんと、乃ち往いて粟門及び速吸名門を見給へり。然るに此二海峡は潮流太だ急なるが故に筑紫日向の橋の小門の阿波岐原に到りまして、身に着け居給ひし種々の物を投げ棄て給ひ、其等より多くの神々成りませり、其――

(投げ棄つる物は)

(成りませる神は)

- 御杖……………衝立船戸神
- 御帶……………道の長乳齒神
- 御裳……………時置師神
- 御衣……………和豆良比能宇斯神

御禪……………道侯神  
御冠……………飽昨之宇斯神  
左の御手の手纏……………奥疎神  
奥津那藝佐昆古神  
奥津甲斐辨羅神  
右の御手の手纏……………邊疎神  
邊津那藝佐昆古神  
邊津甲斐辨羅神

なり。是に於て上つ瀬は瀬速し、下つ瀬は瀬弱しと詔り給ひて、初めて中つ瀬に隨り迦豆伎て滌ぎ給ふ時に成りませる神は

八十禍津日ノ神  
大禍津日ノ神  
大綾津日ノ神  
神直日ノ神

大直日神  
 伊豆能賣神  
 底津綿津見神  
 底筒之男命  
 中津綿津見神  
 中筒之男命  
 上津綿津見神  
 上筒之男命

なり。後なる三對の綿津見神(海神は阿曇連等が祖先の神々として齋く所なり。此阿曇連等は綿津見神の子、宇津志日金拆命の子孫なり。又た底筒之男命、中筒之男命、上筒之男命の三神は墨江(往吉)の大神なり。

(二)希臘及羅馬の禊祓  
 アポロンの禊旅行

二 希臘及羅馬の禊祓 —  
 アポロンの禊旅行

日本と希臘羅馬と同一儀式

日本國民が清淨を貴び、神話時代より其禊祓の有名なる習慣儀式あるが如く、希臘羅馬人等が同一の性質を有し、同一の習慣儀式を有せるは、具眼の歴史家は必ず之れに氣付く可きなり。希臘羅馬人等は罪惡を以つて不淨なりとし、道徳の善惡は淨不淨の二種に大別し、不淨は禊と祓とに由りて淨む可しと爲す。不淨の最大なるものを殺人罪と爲し、屍體接觸之れに次ぎ、男女交接及び不吉の兆象を見たる時亦不淨なりと爲す。其不淨を淨むるの方法たるや、或は水、或は火、或は空氣、或は土砂、或は月桂樹(日本の榊)の枝等を以つてするなり。神社に參詣して禮拜を行ふには、必ず社前の御手洗にて其手を淨め、神社に奉納を行ふ時は、必ず齋戒沐浴を行ふ。又た海水は清水よりも清淨力を有すと爲し、伊邪那岐命の海水の禊參照、炬火、火、及び硫黃等亦清淨力の大なるものにして、聖火を投じたる水は大に宜しと爲す。又た砂及び鹽花を以つて物を摩擦するも極めて効力多しと爲す。アテーナイに在つては何れの公共集會にも、必ず清め式及び祈禱を行ひ、又た大神ゼウスの毎年の大祓あり。大事變あるに際しては、全國の大祓を執行し、神功

皇后の國の大奴佐國の大祓の如し戦争後の如きは必ず之れを行ふ。是れ死殺流血の不浄を淨むるなり。艦隊を發遣し、軍隊出陣するの前には、必ず祓式を行ふ。

是れグレンシア、ローマの禊祓の大略なり。其詳細は吾人茲に、日本人に對して之れを言ふの要なかる可し、何となれば其等は全然日本と同一なればなり。

日光の神アポロンは、グレンシア諸神中重大なる神なりと雖、其バルナツ山山のデルフイに宮居を定め給ふの前、其地に住せし有害なる大蛇を退治し給ふや、尙ほ其血に汚れありと爲し、遠く北地に旅行して禊し給ひしことは、伊邪那岐命が、身は大神にましつゝも、遠く北に向つて粟の門、速吸名門を見て、再び歸りて最後に筑紫日向の阿波岐原に禊し給ひしが如し。(アポロンの北方旅行は、伊邪那岐命の北方旅行と對照するを得可し。伊邪那岐命の禊地理及び「あはぎ」橋等に就いては、後に論ず可し。)

アポロンの禊

(三) 伊那志許米、穢繁國の希臘語

「伊那」  
「志許米」

### 三 「伊那志許米」穢繁國の希臘語

伊邪那岐命、黄泉國より還りて詔り給はく、「吾は伊那志許米、志許米岐、穢繁國に到りて在りけり」と。「伊那志許米」志許米岐とは果して何を意味せる言語なるぞ。余の意ふ所を以つてすれば、伊那とは「恐ろしき」を意味せる所の希臘語 *airos* なる可く、志許米或は志許米岐とは「葦原醜男、醜の丈夫等の如く、強力を意味せる *isxos* の語源に出でし」*is* には非ずして *isxos* 即ち「嘔吐的」なる希臘語に源けるものなる可し。何となれば古事記の著者は醜女は志許賣と書き、此段の「しこめ」は志許米と書き同じく「メ」の發音なりと雖、賣と「米」とを異にせるに據つて見る時は、兩者其語を異にせるを察す可く、賣は女なるべく、今此處に謂へる所の「しこめ」は醜女の *isxos* 女に非ずして、*isxos* 即ち「嘔吐を催す」を意味せる「シ」なる可く、且つ其全體の意味より言ふも、當然と爲す。同じく此希臘語より出でし所の *isxamisu* なる英語は、古は「スケアミッシ」と發音なしたる可く、「ス」は「シ」となり、「ケア」は「コ」に收縮し、「ミ」は「メ」

となり、「イッシ」は形容詞語尾「キ」を添加する時は、茲に「シコメキ」の語を得る如し。

次に「穢繁國」とは如何なる言語なる可きぞ。「穢き」とは、外物「異物」、未知物を意味し、従つて不淨を意味せる所の希臘語 *kyanos* と同一語にして「キセノス」は吾人の日常使用せる所の「キタナシ」「キタナシ」穢なる語なり。「繁國」とは前述志許米岐と同一語なる *kyanos* の「しき」となりしものゝ如く思はれ、穢き繁國とは「不潔なる他國を意味せるものゝ如し」。

吾等の日常使用せる所の「キタナラシ」なる言語は右(外物、外人)と、「排斥」との合成語にして、之れを *kyanos* と謂ふ。「キセネラシア」は吾人の所謂「キタナラシ」「不潔排斥」にして、余の郷里宇和島に於ては、希臘語其まゝに「キタナラシア」と言ひ、不潔物排斥の命令意志を發表せるなり。(希臘に在つては「外人排斥」に此語を使用す)。

又た「*kyanos*」とは放逐排斥にして、かの「神やらひに、やらひ給へり」等の「やらひ」

「穢繁國」

「きたならし」

「摘要」

對照

に相當せるものと爲す。

日本の禊祓の精神、習慣、儀式等の、凡て希臘羅馬等の夫れと同一なること此くの如し、又た「シコメキ」「キタナキ」等の言語全然同一なる——彼我偶然の一致とは見る可からざるが如し。

(日本)

(希臘羅馬)

- 清淨潔白主義……………同一
- 禊祓習慣儀式……………同一
- 伊邪那岐命の禊旅行……………アポロンの禊旅行國
- 日本語「シコメキ」……………希臘語同一
- 日本語「キタナキ」……………希臘語同一

日本語「キタナキ」……………希臘語同一

希臘語同一

希臘語同一

希臘語同一

希臘語同一



### 第六章 天照大御神の御誕生——

#### 世界三分統治

##### 一 三貴子の生誕——世界三分統治

日本書紀は曰く「伊邪那岐伊邪那美命共に議つて曰く「吾己に大八洲國及び山川草木を生めり、何んぞ天下の主たるものを生まざらんや」と。是に於て共に日神を生みませり。大日靈貴と言ふ。此御子光華明彩、六合の内に照徹る。故に二神喜びて曰はく「吾が息多しと雖此く靈異しき兒は有らず。久しく此國に留めまつる宜からず、早く天に送りて、授くるに天上の事を以つてすべし」と。次に月神を生みまし、次に蛭兒を生みまし、次に素戔鳴尊を生みまし」と。然り、此文正々堂々たり。然りと雖——

古事記は前章阿波岐原の記事に連続して曰く——是に伊邪那岐命、左の

(一)三貴子の生誕——世界三分統治  
三貴子の生誕

左の目——日

右の目——月

御頸珠——ミクラダナノ神  
高天原

夜國  
海原

(二)目に關する希臘熟語と日月

御目を洗ひ給ひし時に成りませる神の御名は天照大神(日)。  
次に右の御目を洗ひ給ひし時に成りませる神の御名は月讀命(月)。  
次に御鼻を洗ひ給ひし時に成りませる神の御名は建速須佐之男命。  
此時伊邪那岐命大く歎喜して詔り給はく、「吾は御子生み生みて、生みの終に三柱の貴子を得たり」と詔り給へり。

即て其御頸珠の玉の緒、母由良邇取りゆらかして、天照大御神に賜ひて詔り給はく「汝が命は高天原アーメニヤ方面を知らせ」と。其御頸珠の名を御倉振舉之神と謂す。

次に月讀命に詔り給はく「汝が命は夜の食國(埃及方面)を知らせ」と。  
次に建速須佐之男命に詔り給はく「汝が命は海原伊太利方面を知らせ」と。  
(根之堅洲國は希臘方面)

##### 二 目に關する希臘熟語と日月

伊邪那岐命目を洗ひ給へば日神天照大御神と、月神月讀命生れ給へりと

日月と目と

ブラトーン及び  
耶蘇

(三)アテーナ  
女神の生誕

の神話は希臘語「目」に關する熟語之を證明し、又た是れ希臘人の信仰たるを示めすものなり。希臘人は「日」を謂ひて「晝の目」(ὄφθαλμος ἡμέρας) と謂ひ「月」を謂ひて「夜の目」(ὄφθαλμος νυκτός) と言へり。是れ目と日月との關係に出でし所の神話にして、古事記の記載と一致せることは、日月の如く明瞭なることにあらずや。元來希臘人は最も眼を貴重する人種にして、大哲ブラトーンの如きも亦目と日光とを比較し、延いて智性の光明に喩へたり。耶蘇教の經典も亦高天原精神及びブラトーン説を傳承して「身の光は目なり」の言を爲せり。是等の思想と是等の熟語とは、實に日本の日月神誕生神話の起源を説明するに十分の價值あるものと謂ふ可し。

### 三 アテーナ女神の生誕

天照大御神の伊邪那岐、命の目より生れまし、事は、吾人をしてアテーナ女神のゼウスの前額より生れ給ひしとを想ひ起こさしめずんばあらざるなり。



アテーナ女神

希臘方面に傳はれる天照大御神 希臘の古代陶器畫

アテーナ女神の類  
誕生—父神の額  
より

武装の女神

(四)愛の女神  
アフロヂテ

大神ゼウス、始め女神メチス *Metis* と婚し給ふ。「メチス」とは思慮を意味す。然りと雖女神メチス、ゼウスに告ぐるに其生まん所の子は、ゼウスよりも有力なる可きを以つてし給ひしかば、ゼウスの神恐れて、メチスの懐妊するや、直に之を呑み給へり。然りと雖、御子はゼウスの頭に生まれ玉ひてより、ゼウスは頭の痛みに堪へ給はず、鍛冶の神ヘーファイストス、ゼウスの前額を割りて助産して生ませたるは一女神なり、アテーナの御神と謂ふ、即ち智慧の女神なり。

女神アテーナ生れながらにして甲冑を着し、槍を執り楯を携え、多くの神々の前にて大地を踏み、槍を揮ひ、叫び給へば、神山オリンポスは、爲めに震動し海水山上に登りしと謂ふ。

#### 四 愛の女神アフロヂテ

日本書紀の、天照大御神の美の讚美は、吾人をしてアフロヂテ—女神を想ひ起さしむるなり。女神アフロヂテ—は艶美を以つて一切女神中の第一

天照大御神の美  
とアフロデテ  
女神の美

にませり。若し日本書紀の言を借りて形容せば、光華明彩、六合に照徹せりと謂ふ可く、大神ゼウスも特に寵愛し給へり。其此女神の美麗なるや太古世界第一の美人なりとの傳ある所の、かのトロヤのヘレンの如きすら、此女神の美しき御頭、可愛らしき御胸、及びすゝやかなる目を見ては、之れを歎美せざるを得ざりしなり。

ゼウス神の寵愛

女神嘗て戰場に出て、負傷して歸り玉ふや、大神ゼウス、いともやさしく詔り給はく、「愛する吾女よ、戦争の如きは、おん身の爲し給はん事に非ず、おん身には他に優しき技術ありて、美しき微笑、可愛き愛嬌はおん身の職分なれ。戦の事はアレース及びアテナ御神に委かし給へと」他の神々に對し給ふ態度とは殆ど趣を異にし、アテナ女神に對しては、吾子ながらも敬畏の念を以つてし給へりと雖、アフロデテ女神に對しては、殆ど愛に溺れ給ふが如し。是れ其特に此女神を寵愛し給ふを示めすものにして、日本書紀が特に天照大御神の美を讃へて、伊邪那岐命が特に天照大御神を寵愛し給へりと謂へると殆ど同一の觀あるなり。

神話の比較

羅馬建國とアフロデテ

(五)希臘神話  
の世界三分  
統治

希臘の神代三代

されば吾人は日本書紀のかの記事と、アフロデテの此事とを比較する時は、日本書紀の天照大御神の讚美は、實はアフロデテ女神の事を謂へるものにあらざるやの感なきこと能はざるなり。  
且つ余が同民族説を主張せんとする所の羅馬に在つては、其建國及び守護の神を以つてピナス即ちアフロデテ女神と爲せるに由つて觀する時は、同民族の事として、同一思想在つて存し、爲めにアテナ御神の形容語中、アフロデテ御神の形様語の、共通して交れるあるは、決して有り得ざるのことに非ず、又たこれ同一神の二様の傳と見るも敢て異しむに足らざるなり。

五 希臘神話の世界三分統治

日本の神話に於けると同じく、希臘の夫れに於ても、宇宙の三分統治行はれたり。希臘神話に於ては神世三代ありて、第一はウラノスの御代なりしがウラノス其子等を虐待し給ひしより、一子クロノスを排して天位を繼

ぎませり。然りと雖父を殺せし者の運命は又た報はれて同一運命に遭遇し給はざるを得ず。クロノスの神之れを恐れて、我子を呑み給ひ、最後のゼウスのみは、母御神の計略に由りて助けられて、秘密なる場所に成長し給ひしが、其一旦成長し給ふや、父御神を幽閉して、今まで呑み込み給ひし兄弟五柱の神々を吐き出さしめ給へり。

其等兄弟の神々はヘスチア、ケレース、ヘーラの三女神とハイデース、及びポセイドーンとにして、ゼウスは末子にまませり。然りと雖、ゼウス御神は他の神々を助け出だし給へる功に由るか、或は末子寵愛主義の相續權に由るか、衆神に推されて、新神世第一座の最大神と爲り給ひ、茲に三人の男子の間に世界三分統治は行はるゝに至れり。

ゼウスは第一の大神にましまして家長の位に即き、自ら天界と地上との政治を統治し給ひ、

ポセイドーンには海の世界の統治權を委託し給ひ、  
ハイデースには黄泉國の統治を委託し給へり。

ゼウスは第一の神

ゼウス——天

ポセイドーン——海  
ハイデース——黄泉

神話の比較

伊邪那岐命とゼウス神

天照大御神とアテーナ女神

(六) 日本希臘對照  
伊邪那岐命とゼウス

希臘の世界三分統治は、一種の三頭合議的に成れりと雖、日本に在つては伊邪那岐命の、自ら三子に任命し給ふに成り、且つ伊邪那岐命は、家長權即ち天位を長女天照御神に譲りて自ら日の少官わかみかみに隠れまし、三分統治の定まりし後は、伊邪那岐命は神話中に活動し玉ふことあらざるなり。

素よりゼウス御神は御子アテーナ女神の性格に自己を寫し、アテーナ女神は宛然ゼウスの性格を以つて、特にゼウスの前額より生れ給へる神として、ゼウスの位と同一たり、又た最も尊貴の神にまませるは、天照大御神の關係に異なること無し。

六 世界三分統治神話の日本希臘對照

此くの如く日本に在つては、天は天照大御神の知らしめす所なりと雖、希臘に在つてはゼウス之れを知らしめすなり。ゼウス御神は伊邪那岐命の如く、アテーナ女神に天位を譲り玉はずとも、尙ほ殆ど代理せしめ給ふが如き觀あり。

須佐之男命とポ  
セイドーン

月讀命とハイデ  
ース

海原は、我に在つては須佐之男命之れを知らしめし、彼れに在つてはポセイドーン之れを知らし召す。是れ亦對照を得たり。  
然るに月讀命は夜の食國を知らし召すと雖、希臘に在つてはハイデース黄泉國を知らし召せり。夜の國と黄泉の國、其闇黒相似たりと雖、一は地上の夜たり、他は地下の死界たり、此點相違なきに非すと雖、尙ほ其暗黒界の思想や共通なりと謂ふ可し。

日本黄泉神話の  
不完全

且つ日本神話に在つては黄泉神に就いて矛盾あるなり。何となれば曩きに伊邪那美命が死して黄泉に行き給ふや、其時既に黄泉神なる者在りて存し、此神の許可を得て伊邪那岐命に伴はれて、再び上界に歸へりまさんとせり。然らば此時此くも伊邪那美命の如き大御神に對して權威を有せる黄泉神とは如何なる神にましますぞ。古事記も日本紀も、未だ決して黄泉神、黄泉醜女等の生誕及び其存在の事を言はざるなり。然るに此大權力ある黄泉神は、伊邪那美命が其國に到りますの前、既に嚴然として黄泉國に座しませり。然るに古事記は後段に至りて伊邪那美命を「黄泉津大神」と稱し

其理由

(七)玉の緒  
「もゆらに」  
の希臘語

まつれり。

是れ吾人の以つて日本の黄泉神話に矛盾ありと言ふ所以なり。然りと雖今若しグレンシア神話のクロノスの神世よりゼウスの神世に移りし神話を以て補ひ見れば、此時既に黄泉神の存在を認め得可きなり。何となれば彼れの神話に在つては、世界三分統治はゼウス神世と同時に進行はれしも、我に在つては、伊邪那岐命の神政以後に行はれしを以つてなり。此くて希臘神話に於て、早くより存し給へる黄泉神は、我れの神話の未だ説き至らざる前の時代に混出し給ひ、又たオルフェウス及びプロセルピナの神話を混じ(前記)此くて前後の矛盾を生せしもの、如し。然りと雖、吾人は茲に其矛盾を説かんとに非ずして、是等神話分子其物の共同通一のものあるを示めさんが爲めに此く言ふ者なり。而して世界三分統治神話は、我と彼と大體上、全然同一なり謂ふ可きなり。

### 七 玉の緒「母由良邇」の希臘語—— 國典研究の樞要語

最も重要な言  
語の誤解

國典の研究及び解釋上、此くまで重大にして、而も日本歴史學有つて以來、此くまで解釋せられず、又た此くまで誤解せられたる言語は伊邪那岐命が天照大御神を生みませし神話中なる玉の緒「母由良邇」の言語に過ぎたるは無し。之れが解釋古來少なからずと雖、未だ一人として其正解に達したる者無きに至つては、あゝこれ日本歴史學及び日本語學の耻辱と言ふ可きにあらずや。

「もゆらに」は振  
搖を意味せず

「母由良邇」に對する古來の解釋を概言すれば、第一は糸にぬきたる玉の相觸れて瑤々と鳴り響く音を形様せるものとなす、是れ本居宣長の説なり。第二は之れを然らずとなし、たゞ搖り動かす形容なりと。諸家の意見大要左の如し。然りと雖、古事記著者が、事更に此一語を發音字もて書き記るし、一種重要語なるが如く爲せるは果して何故ぞ。後代の研究者たるものは、此邊にまでも注意を拂ひて、綿密なる思慮を施こさざる可からざるなり。若したゞ普通の音響、普通の振搖等を表はさんとせば、何ぞ發音字もて平凡なる事を表はすの要ありとせん。必ずや何等か重要にして注意すべき意

家長權の贈與を  
意味す

天照大御神は吾  
皇室の家長と定  
まる

あるに由るものならざる可からず。然り大に之れあり、余は之れを希臘に於ける日本古語に於て發見し、此一語は國典研究上の重要なものにして、又た中樞的のものあるを知り得たり。

此伊邪那岐命の玉の緒もゆらには玉の觸れ合ふ音に非ず、又た其振搖の形容にも非ずして、實に「家長權の贈與」——天位の讓賜を意味せる所の *moipra* 或は *moipra* なる希臘語たるなり。即ちこれ當然其人に歸すべき權利ある物「家督遺產」等を意味し、運命の定めを意味せる言語なり。(大抵の註解者は「母由良邇」の「邇」を以て「テニオハ」の「に」を爲すと雖、「邇」は「テニオハ」に非ず、爾は「テニオハ」なり注意して讀むべし。)

伊邪那岐命が天照大御神に玉の緒を賜はりしは、決して無意味に取り搖らがし、或は音を立て、小兒を喜ばすが如き淺薄無意味の態度を以つてし給ひしに非ずして、此讓與は實に、天位は天照大御神に定まり、又た延いて天照大御神の後裔は天位に在る可き資格のものなるを明かにせるものと謂ふ可く、余が此語を謂ひて國典研究上重要な言語なりと言ふは、豈意味な

きものならんや。

### 八 「御倉板舉之神」名と「統治權」

(八)御倉板舉之神とは何ぞや  
倉に非ず、棚に非ず

然りと雖伊邪那岐命が此く取りゆらがして天照大御神に賜ひし其御頸珠の名を、御倉板舉之神と謂ふは、果して何を意味せるものぞ。從來の解釋に據る時は、大神の御倉に藏め、高き棚の上に安置し給ひしに由るものなりと爲す。然りと雖此くの如きは何等の理由ある説明に非ずして、幼稚なる思想の牽強附會の解釋たるのみ。吾人は吾天照大御神に當りませるアテナ女神の裝飾或は武裝を研究して、其れを以つて吾國典研究の嚮導と爲す時は、意外に深玄なる含蓄あるを發見するものなり。かの、天照大御神が父伊邪那岐命より讓受け給ひし所の此御頸珠の玉の緒なる物は、アテナ女神が、大神ゼウスより讓受け給ひし所のアイギスなる肩衣の玉裝に當るものゝ如く、此肩衣は内に雷霆を包み、閃電もて縁取りせるものにして、「破る可からず」「敵すべからざる」武器たり楯たるなりと謂ふ。又た之を *Aphidhen* と

「強力、不可敵」

謂ふ。余はアテナ女神の「アイギス」に關する知識を以つて「御倉板舉之神」の如何なるものなるか、又た何を意味せるかを研究せんか。余は言ふ是れ希臘語「強力」「不可敵」「治者」等を意味せる所の *Kratos*, *Krativios* 或は *Kraton* (皆



アテナ女神のアイギス  
御頸珠・一名御倉板舉之神に當る——種々のアイギス畫を参考して畫くものなり

同一語の曲げの「クラタナ」(倉板舉)となれる神名なるべしと。されば——  
(日) *Kratana*(倉板舉)  
(希) *Kratein*  
の綴字形を見ても其同一なるを認むることを得可し。

且つ此肩衣の玉裝は、アテナ女神に在つては、一名之を *Amalthea* と稱し、又た其雷霆電撃の威力ありと爲せるを考ふるに、此「アマルテア」なる語は *Amalthea* は「電撃」たり、*Amalthea* は「女神」たり、即ちこれ「電撃の神」を意味せるものゝ如し。



余の郷里宇和島に在つて、落雷を「アマル」(前記 Amal) ならん」と謂ふ。是れ電撃にあらずして何ぞや。然るに外國の語原學者は「アマルテア」の意義は之を知らざるものゝ如く、單に之を謂ひてゼウス神を養ひたる牝山羊の名ならんかと爲せり。此れ宇和島語は以て「アマルテア」に眞意義を與へ得たるものゝ如し。而して雷霆は不可抗抵の強力者なりとせば、天照大御神の御倉振擧之神とはアテーナ女神の「アイギス」に當り、強力敵す可からざるものを意味せる語なるを知るべし。決して從來の如き、大神の御倉の棚の上に安置しある所の神なりとの解釋の如き淺薄無意味のものに非ずして、至大非常の御稜威の神たり、又た神器たるを知るなり。之れ三種の神器の神璽に當るものゝ如し。(古事記等の所傳には多少一致せざるものありと雖、全體の研究に由る時は、神璽は必ず此御倉棚の神なる如し。此に關する眞言は酒神バックス教の秘密奥儀に達して始めて解すべきなり。此こには只大略を言ひ置くのみ)

(九)天照御神とアテーナ女神との御頸珠の玉の緒

兩女神の御頸珠の玉緒

「アイギス」の頸装

ヘルセウス神話

### 九 天照大御神とアテーナ女神との御頸珠の玉の緒

然りと雖、尙ほ吾人の比較を要する一物は、御頸珠の玉の緒に關することゝ爲す。天照大御神が、父伊邪那岐、命より其御頸珠の玉の緒を譲り受け給ひしと同じく、アテーナ女神も亦父ゼウスの神より「アイギス」なる肩衣を譲り受け給へることは、前に一言せる所なり。此「アイギス」なる肩衣には普通に「ゴルゴン」なる妖女の頸を胸部に裝飾と爲せるものにして、即ち其「頸」を玉として御頸に懸けて装りと爲し給へるなり。而して此頸たるや、須佐之男、命に當る所のヘルセウス神がアテーナ女神に奉獻せし所なりと傳ふ。此妖女の頸に關しては後章須佐之男、命神話及びヘルセウスの「ゴルゴン」の頸取神話中に述べべしと雖、古事記の所謂御頸珠の玉の緒とは、一面天照大御神の御頸に掛け玉ふものたると同時に、亦「ゴルゴン」の頸を珠と爲せる裝飾たるを意味せるものゝ如し。

摘要比較

此くて三貴公子の生誕中、特に日月神と目との關係は、希臘の熟語は、東西同一なるを證明し、世界三分統治亦日本思想と希臘思想との合一を示し、アテーナ女神の尙武性とアフロデテール女神の美とは天照大御神の形容を成し、『玉の緒、由良邇』及び『御倉板擧之神』なる語は希臘語的解釋を以つてするに於ては非常に重大にして又た非常に御稜威貴き語なるを知り、御頸珠の玉の緒なるものは、希臘神話に照らし見て、意味重遠なるものなるを知り得たり。此等對照略表左の如し

對照

(日本)

(希臘、羅馬)

目と日月との關係……………希臘熟語の日月と目  
 天照女神は父神の目より……………アテーナ女神は父神の前額より生る  
 其美……………アフロデテール女神  
 日本建國、天照大御神……………ローマ建國、アフロデテール女神  
 天照大神はアテーナ的勇壯……………アフロデテールは天照御大神的美

世界三分統治……………希臘神話の世界三分統治  
 天——天照大御神……………天——ゼウス  
 (伊邪那岐命隱居)……………(アテーナ女神代理)  
 海——須佐之男ノ命……………海——ポセイドーン  
 夜——月讀ノ命……………黃泉——ハイデーヌ  
 玉の緒「母由良邇」……………希臘語「家督」なり。  
 「御倉板擧之神」……………希臘語「強力不可敵」の意味  
 御頸珠の玉の緒……………「ゴルゴン」の頸珠裝

### 第七章 尙武護國の天照大御神

#### 一 天照大御神の尙武護國

伊邪那岐命の他の二貴子、各其任命せられたる國を知ろし召すと雖、獨り須佐之男命、其仕處に赴き給はずして、八拳鬚胸に垂るゝに至るまで啼きいさちり、其泣き給ふ、狀は青山を枯山なす泣き枯らし、河海悉く泣き乾し、是れを以つて惡神の音ない、蒼蠅なす皆満き、萬の妖悉に起りき。

是に於て伊邪那岐命、須佐之男命に詔り給はく、「何故に汝は任命されし國を知らさずして、哭きいさちる」と。答へ給はく、「僕は妣の國、根之堅洲國に罷らんと欲ふが故に、哭く」と。伊邪那岐命大に忿怒り給ひ、「然らば汝は此國には、な住みそ」と詔り給ひて、乃ち神夜良比爾夜良比賜ひき。此くて伊邪那岐命は淡海の多賀になも坐します。

是に於て須佐之男命請ふて曰く、「吾今教を奉じて根之國に就かんとす。

(二)天照大御神の尙武護國

須佐之男命の亂暴

大女神の武裝

須佐之男命の告別

故に暫く高天原にまうでて、姊命に相見へて後永く退らんと。勅して之れを許し給ふ。須佐之男命乃ち天に參り上ります時に、溟渤之れを以つて鼓盪き、山岳之れが爲めに鳴り响へたり。是れ神性雄健の然らしむるなり。

天照大御神素より其神の暴惡なるを知りませり。須佐之男命の來給ふ狀を聞かして、勃然として驚き詔給はく、「吾弟命の來ますは、必ず喜はしき心ならず、我國を奪はむと欲はすにこそ。夫れ父母既に諸子に任し給ひ、各其境あり、如何んぞ就くべきの國を棄て置きて敢て此處を窺ふや」と。即ち御髪を解き、髻に纏き、裳を縛ひて袴と爲し、御髻にも、御鬘にも、左右の御手にも、各八尺の勾璫の五百津の御統の珠を纏き持たして、背には千箇の鞞と、五百箇の鞞とを負ひ、臂には稜威の高鞞を取り佩して、弓腹振り立て、劍の柄を急握り、堅庭は、向股に踏みなづみ、沫雪爲す蹶散かして、稜威の「雄詰」を奮るはし、稜威の「噴讓」を發して直ちに「何故上り來ます」と問ひ給ひき。

須佐之男命答へ給はく、「僕は邪心なし。唯だ父大御神のみこと以て、僕が哭きいさちる事を問ひ給ひし故に申しつらく、僕は妣の國に往かんと欲ひ

て哭くと申し、かば、父大御神、汝は此國にはな住みそと詔り給ひて、神夜良比夜良比賜ふ故に、彼の國に罷り出でなんとする状を申さんとしてこそ参り上りつれ。異しき心なし」と申し給へり。

こゝに天照大御神詔り給はく「然らば汝の心の清明ことは如何にして知らん」と。須佐之男命答へ給はく「各宇氣比て子生まん」と。

然りと雖日本書紀に據る時は大に其傳を異にし、須佐之男命は、自ら好みて根之堅洲國に行かんと爲し給ふに非ずして、父伊邪那岐命の命令に由りて止むを得ず行き給ふものゝ如し。是れ一種の左遷なり。曰く――

須佐之男命勇悍にして安忍なること有り。又た常に哭泣を以つて行と爲し給ふ。故に國內の人民多く天折し、又た青山を枯山と爲し給ふ。父母の二神須佐之男命に勅して詔り給はく「汝甚だ無道なり、宇宙に君臨す可からず。當に遠く根之國に適き給ふ可し」と。遂に之れを逐ひ給へり。

是に須佐之男命請ふて曰く「吾今教を奉て根之國に就かん、暫く高天原に至りて姉命に相見へて後永くまかりなん」と。勅して之れを許し給ふ。

根の堅洲國

(二)アテーナ女神と海神ポセイドンの競争

アテーナイの昔

須佐之男命高天原に至り姉命に見へて曰く「父母己に嚴勅あり、永く根之國に就かん」と。

是に由りて之れを觀れば、須佐之男命が「根之國」或は「根之堅洲國」に行き給ふは、其自ら好みし本意に非る如し。此に於てか「根之國」「根之堅洲國」の意味は深からざるを得ず、又た從來の解釋に超絶したる強固なる解釋無かる可からざるなり。余は章尾に之れを論ず可し。

### 二 アテーナ女神と海神ポセイドンの競争

須佐之男命が天に上り來ます状態は、宛もアテーナ女神と海神ポセイドンの競争の如きものあり。今其大要を述べんに――

グレシアの太古、人民尙ほ甚た稀少にして今のアテーナイ (Athens) 市の如きも、僅かに其小丘の中腹あたりに、少數の人々穴居し或は粗屋を作りて住居せるに過ぎざりき。然るにこゝにケクロペス (Cecrops) なる蛇人來

二神の出現

りて其智慧を以つて人々に農耕衣食の事を教へ、人倫神事を教へ、遂に人々に敬まはれて此地の王となれり。

一日二個の貴人ケクロベス及び人々の前に現はれ出でたり。一人は貴女にして一人は男子なり。各々名乗りて曰く『吾は海神ポセイドーンなり』。曰く『吾は智慧の神アテーナなり』と。

ポセイドーンの神詔り給はく、此地に名付くるに我名を以つてし、我を守護神として祭る可し、船舶、金銀其他の富を興ふ可し』と。

アテーナの神も亦詔り給はく『人々吾が言をも聽け、我れは萬事萬物中最も貴重なる智慧なるものを授けん』と。

茲に於て人々、二神の此地の人民に授け玉ふ物の競争に由つて其の守護者を定む可しと爲しければ、ポセイドーンは、携え給ふ三叉戟を以て丘上の岩を撃ち給へば一頭の白馬躍り出でたり。アテーナの神は携え玉える槍を以て地を突き給へば綠葉繁げれる橄欖樹生え出でたり。茲に於て人々判定して、アテーナ女神の恩賜を以つ貴重なりとし、此神を守護神と仰ぎ、

ポセイドーンと馬

アテーナ女神と橄欖

アテーナ女神の勝利

(三)アテーナ女神の武装と護國

此地をアテーナイと命名し、此地の高丘を「アクロポリス」と謂ひ、此處にアテーナ女神を祭り、此に此地の人々は智慧に於て世界第一等の國民となれり。

アテーナ女神とポセイドーンとのアテーナイ國の競争は、是れ天照大御神に對する須佐之男命の態度と、天照大御神が「我國を奪はんと欲はすならん」と想像し給ふと、其關係や甚だ同じきものありと謂ふ可し。

然りと雖尙ほ他に比較すべき事は須佐之男命の天に上ります時山海震蕩せりとの記事に對して、アテーナ女神の武装して生れまし、時天地震動せりとの事と、海神ポセイドーンの別名を「世界の震撼者」と稱すること、の二傳説と爲す。

### 三 アテーナ女神の武装及び護國

アテーナ女神が、ゼウスの前額より生れ來まし、は前に之を言へり。其生れますや智慧の女神は甲冑を着し、楯を左に槍を右に、武装嚴重なるもの

ホメーロスの讚美歌

なりき。ホメーロスの讚美歌に曰く――

「ゼウス御神は其前額より、金色燃然たる武装の女神を生みませり。女神は「アイギス」防備不敵の肩衣伊邪那岐命の御頸珠に當る着け給ふ所の不死なる御神の頭より躍り出でつゝ、父命の前に立ちて、其投槍を揮ひ給へり。是に於てオリンボスの大御山は此灰色の眼なる女神の重さに激動し、地は痛みを以つて呻唸き、海は紫の波を起こして其水烟跳ね上がれり」

と。此くて女神は完全なる武装を以つて生れ給へり――實に大神ゼウスの「思想」は武装の思想なること吾天照大御神の如きなり。

#### 四 彼我兩神話の異同

此に於て吾人は彼我神話に就いて聊か比較を試みんに――天照大御神と須佐之男命との關係は、素より國の爭奪或は競争と謂ふが如きものに非ざりしと雖、尙天照大御神をして須佐之男命は「我國を奪はん」とし給ふにあ

(四)彼我兩神話の異同

(五)根之堅洲國は新植民地なり  
「ネノカマスグニ」は直に黄泉を意味せず

らずやとの疑念あらしめしが如きは、兩神話共通のもの有るを示めせるなり。

須佐之男命が天に上ります時山海震動するの形容は、希臘神話に在て海神ポセイドーンが「世界の震撼者」との異名あるに合し、又アテーナ女神の生れ給ひし時オリンボス山震動せりと謂ふの形様に對比するを得べく、天照大御神が護國の精神を以つて武装して戰鬥の準備を爲し給ふの勇ましきは、アテーナ女神の武装して生れ給ひ、武の神たり、又た護國の神たること全然一致して毫毛も相違あることなし。

#### 五 根之堅洲國は新植民地を意味す

此章に注意すべき二三の言語は――第一は須佐之男命が往き給はんとせる「根之堅洲國」なり。其、妣の國なる名稱あるに據りて考ふる時は、是れ黄泉國なる如しと雖、實は是れ古代言語の不明より、此意味の不明を生じたるものたるなり。若し是れ黄泉國なりとせば、「古事記」「日本紀」等は何故に黄

泉國と書かずして、別名を以つて之れを呼ぶか。是れ其歴史家たるの資格として承認す可からざる所なり。或は「根」と云ひ、「堅州」と云ふに據りて、地下の黄泉國なるが如く、古來一切の註釋者が之を黄泉なりと解したるも無理ならぬ事と謂ふ可し。然りと雖、是れ此言語は黄泉を意味せるに非ざるなり。伊邪那岐命の如きすら「志古米岐國」として遁げ歸り給ひし國を、須佐之男命如何で特に好み給はんや。

今「根之堅州國」なる語を案するに、是れ例の支那文字を以つて發音に當てしものに過ぎざるが如し。希臘語には *neonacharatos* 或は同一言語の一形状たる *neo-nacharatos* なる言語ありて「新創建」或は「新植民」國等を意味せるなり。今若し「ネオカタステミ」の「オ」を「ノ」に變更し、語尾の發音を訛る時は、茲に直に「ネノカタステクニ」なる日本語を得るなり。今これを圖式に表はす時は左の如くなる可し

- (希) Neo Kathisthemi — ネオカチステミ
- (日) Neno Kathiskuni — ネノカタステクニ

新植民地

高天原神府の雄

其何故に「新創建國」「新植民地」なる言語が須佐之男命の口より出づるかを考ふる時は、吾人は高天原朝廷は實に希臘民族 (Hellenes) の中心たり、又其東西四方に同民族を發遣したりし雄圖を想はずんばあらざるなり。然り高天原の神府は實に世界の文化と平和との中心たりしなり。此事後章に明かなるべし。

(六) 稜威の雄詰と嘖讓と

### 六 稜威の「雄詰」と「嘖讓」との希臘語

次に稜威の「雄詰」及び稜威の「嘖讓」なる言語あり。是れ高天原にて行ふ所の宗教上、勇壯なる精神を發表せる儀式にして「雄詰」は希臘の *Andros* たり、「嘖讓」は *Kopias* なるが如し。これ小亞細亞の大女神レア・キベレ (Rhea Cybele) の祭式に與かる所の神官の行事にして、烈しき音楽に合せて、勇壯なる舞踏を行ふものなり。意ふに此大女神の勇壯なるを稱賛せるものゝ如し。彼等祭司は又た預言を行ひ、武事に携はる。キベレ又た *Cybele* と謂ふ、意ふに日本の天孫降臨の時なる「久米部」は、此「クベレ」の轉訛にして、キベ

レ女神の武勇なる祭司ならんか。

(日本)

天照神、須佐之男命對抗……アテーナ、ポセイドーンの競争

天照大御神の武装……アテーナ女神の武装

須佐之男命の山海震蕩……アテーナ女神のオリンポス山震動  
[ポセイドーン神の「世界震撼者」]

根之堅州國……希臘語

雄詰……同

噴讓……同

對照

(一)皆是尙武の男神、女神

三女神

五男神

### 第八章 天照大御神の御子

#### 一 皆是尙武の男神、女神

是に於て各天の安の河の中に置きて、宇氣布(誓ふこと)時に、天照大御神先づ須佐之男命の佩かせる十拳劍を乞ひ受けて、三段に打折りて、奴那登母母由良に、天の眞名井に振り濺ぎて、佐賀美に加美(咀嚼)て吹き棄つる氣吹の狭霧に成りませる神は――

多紀理姫命(田心姫)

市寸島姻命(後、嚴島姫と書す)一名狹依姫命

多岐都姫命(湍津姫)

なり。次に須佐之男命、天照大御神の左の御鬘に纏かせる八尺の勾瓊を乞ひ受けて、奴那登母母由良に、天の眞名井に振り濺ぎて、佐賀美に咀嚼て、吹き棄つる氣吹の狭霧に成りませる神は――



正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命

右の御髻の珠より成りませるは——

天之菩卑能命

御鬘に纏ませる珠より成りませるは——

天津日子根命

左の御手に纏ませる珠より成りませるは——

活津日子根命

右の御手に纏ませる珠より成りませるは——

熊野久須毘命

なり。

是に天照大御神須佐之男命に告り給はく「是後に生れませる五柱の男子は物實我物に因りて成りませり故に自ら吾御子なり。先きに生れませる三柱の女子は物實汝の物に因りて成りませり。故に汝の御子なり」と。此く詔り別けて給ひき。其前きに生れませる神多紀理姬命(アルテミス)は宗

(二) 神名の意義

處女の神

ミユメズの神々に謝す

像の奥津の宮に坐し、市寸島姫命(ヘスチア)は中津の宮に坐し、田寸津姫命(アフロデテ)は邊津宮(海濱)に座す。此三柱の神は宗像の君等が以て伊都久三前の大神なり。

二 神名の意義

伊邪那岐命の目より、或は鼻より生れ給ひし神々は、又た人間の爲すが如き結婚に因らずして、御子生み給ふことあるは毫も異しむの要なきなり。天照大御神と須佐之男命との關係は、結婚の種類に屬するものに非ずして、只だ相宇氣比て神物を交換し、以つて神威の一種の發現を爲し給ひしに過ぎざるなり。されば天照大御神は、是等八神の御母の位に座しませども、依然として處女の神に座しませり。處女——之れを、バルテノス(Parthenos)と謂ふ。アテーナ女神亦處女神の稱あり。

嗚呼危かりしかな我國典や、若し天祐なくして此まゝに經過せんには、我國典は著しく其價值を減じ、尙一層に輝く可き天照大御神の御稜威は、言語

神名の意義  
從來解釋の誤謬

學者の無學と歴史家の怠慢との雨霧に包まれ終りしや必せり。然るに余はミューズの神々に謝す可き天祐を得たるの光榮を此に發表せんとするなり。何となれば、天照大御神と須佐之男命との生みませる八柱の男女の御子は、決して從來一切の解釋者の解したるが如き平凡なる意味の神々に座しませずして、眞に以つて武略ある天照大御神と勇敢なる須佐之男命との御子たるに相應はしき、尙武雄建の男神女神に座しませることを發見し得たればなり。ミューズの首領アポロンの御神に感謝す。

先づ三女神の御名義考より始めんに。從來の解釋者は是等女神の名義を解釋するに、「天の安川」と「天の眞名井」との水に關係せる如き言語あると、「タキ」瀧なる言語と、「奥津」なる地名と、海神の後裔の祭れる神なる等を材料として、是等神々の名義は、只だ水の形容に過ぎずと爲し、多紀理姫は「瀧つ瀬」早川の瀬等の如き急流を意味せる御名となし、市寸島姫は、齋がれ玉ふ義なりと爲し、其一名狹依姫は瀬寄にして、河の瀬の有様を形容し、多岐都姫は多紀理姫と同様なりと爲せり。多少當らざるに非ずと雖、かの稜威の雄詔を爲し

多紀理姫

稜威の噴讓を與し給ひ、又神功皇后に現はれては、天疎向津姫と名乗り給ふ如き武勇なる女神が、單に「河の瀬」の如しと言ふが如き平凡なる御名の女神等を生み給ふとは、吾等思ふこと能はざるなり。然り、吾人若し希臘語學の援助を藉りて其等諸神の御名の意義を研究するに於ては、其非常に雄健尙的武なるを知るものなり。

多紀理姫命——一名田心姫命と謂ふ。古事記の言へる所に従ひ、其宗像の奥津宮地理は後に論ずと雖、是れ希臘アッチカなるピライウス(Piræus)港の地名なり(に)居ますに據つて考ふる時は、これ希臘神話に於ける Minychia 別名 Artemis 女神即ちアポロンの神の妹に當り給ふ女神の御名なり。又たアポロンの一名を Thargelion と謂ふに考ふる時は、此多紀理姫命はアポロンのターゲリオン(即ち簡略に發音して語尾を略せば「タグリ」と同一名稱の女神と見做し、多紀理姫は「Thargelion」姫と謂ふべく、最も快活敏捷にして、弓矢の術に長じ給ふ女神たるなり。

市寸島姫命——は宗像の中津宮に坐せりとの記事に考ふる時は、こ

市寸島姫

れ菴の神 *Hestia* 女神に當り給ふべく、其の市寸と謂ふは「嚴き」にして希臘語 *イシキ* 或は「イヅ」稜威の語に日本流の動詞語尾「キ」を付けしものなる可し。「イヅ」とは正なり直なり、事物を前進せしめ「直路に導き」「正直」「正義」「眞實」にして、「衝動し」「計畫し」「努力し」「前進せしめ」「指導し」「支配し」「矯正し」「譴責す」等の意味を有する所の壯大嚴肅なる言語なり。されば素より「齊く」の意味を有せざるに非ずと雖、從來吾等の有せし如き單純なる「齊き祭られ給へる」意義の神なりと謂ふ如きに非ずして、神威凜然たる「稜威」の女神たるなり。

田寸津姫命——は希臘語迅速、輕捷を意味せる所の *Talys* に出でし御名なる可し(日本語「瀧」と同一語)。語尾「ス」を「ツ」に發音せば是れ「タキツ」なり。又た其副詞となりしものは「*Talys*」と謂ふ(「タカ」は疾きなり「たか行くや」*はやぶらけ*)の如き舊事紀に此女神を高津姫と謂ふ、皆これ同一語の變形たるのみ。此神宗像の邊つ宮に坐しまして希臘名 *Aphrodite*——美と生々との女神に當り給ふものゝ如し。又これ古事記の下照姫一名高姫なり

右は専ら希臘アッチカなるピライウス港に祭りある三女神の名より得來

田寸津

正勝吾勝の神

りし暗示に基づきし判断なり。然りと雖、宗像三女神及び其地理に關する考證は、後に至つて論ずることゝ爲さん。

次に男神の御名を研究せんか——

正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命——の御名は從來の解釋に據れば正に吾れ勝てり。勝つと速き、穗の多き稻に關してを意味せる神名なりと言ふに過ぎずして、平凡に加ふるに牽強附會を以つてせしものなり。然りと雖、吾人の研究に由る時は此神名は山名河名其他種々無量の形容的言語を重ねし所の複雑にして包含多き神名なりと爲す。

正勝——とは *Miska* 山の名稱なり。此處には小亞細亞の山の名なりとのみ一言し置くに留めん(「酒」を意味する「うまさか」と同一語なることは後に論ず)

吾勝——とは又たこれ小亞細亞なる河の名稱にして、前記正勝山の麓に流るゝ所のアカンブチス (*Acanthus*) なるが如し。若し此「アカンブチス」中より「ンブ」と語尾「ス」とを略する時は直ちに「アカチ」(吾勝)となる可し。是れ希臘

語 *μαρτυρις* にして「不屈不撓」を意味せるなり。

勝速日—とは「勝即ち希臘語 *νικη* の「カチ」となりしものなるべく、「速日」とは、意ふに「光榮」を意味せる所の *σως* の語尾「エ」は「ヒ」と轉ずるの例に由つて、「ハヤヒ」となりしものゝ如し。

天之—とは前記マサカ山南方の山名アマノス (*Amanos*) なる可し。

忍穂—とは希臘 *σως* の「オシホ」となりしものなるべく、「神聖なるものを意味せる言語にして、在原業平の歌の「大原やおしほの松も……」の夫れと同様なる意味要するに「神聖なる」を意味するものゝ如し。

耳命—「み」とは「慶賀、祝福」を意味せる所の「オムニミ」 (*omimi*) なる語の「オ」音は、其先行せる音と融合して「ムニミ」となり、又其收縮して「ミ」となりしものゝ如し。元來此「オムニミ」なる語は、日本人には最と親密なる語にして、其活用せる所の「オメイタイ」 (*ometai*) は日本語「御芽出度」となり、又た「オミサイナ」例へは「福大黒オミサイナ」の如き、或は近松の「おん松囉し、オミサイナ」の如き語となれるものなり。

天之善命卑能命

「ノ命—とは、法律、立法者、有權者、尊貴者即ち「尊」或は「命」に當る所の *νομιμος* にして、語尾「ス」は音變化の例に由つて「ト」となり、こゝに「ノミコト」(命)となりしものゝ如し、而して日本にては通例首音「ノ」を略して「ミコト」と謂ふ。

然らば正勝・吾勝・勝速日・天之忍穂耳命の御名は *Muska + Acampjis + Kata + phne + Amanos + osios + omiyimi + nomikos* の如き、合成名稱にして、意ふに「正勝山アカンブチス河、アマノス山に於ける不屈不撓勝利光榮の神」を意味せるものゝ如し。

天之善命卑能命—は從來の解釋は只だ「美」を意味せるものと爲せりと雖、是れ甚だ漠然たる説明たるに過ぎざるなり。意ふに「天之は尊稱なり」と雖「善比命」とは「血染め」を意味せる所の *σως* に當る御名なるべく、希臘神話に在つてはホイニシアのカドモスの子 *Phoenix* と同一名稱なる可し。これ出雲の臣等の祖なりと云ふに申りて考ふれば、出雲はイドムにして、又ホイニシア (*Phoenicia*) 族なるが故に前記「ホイノス」の希臘語は當れりと謂ふべし。

天津日子根命

天津日子根命——は、從來只だ「天」の「彦」にして何等意味なき美稱なりと解釋し來れり。されども、余の方法を以つて解釋する時は「天」は發音の假り字にして天の意味あるに非ず、希臘語の「破壊し盡くす」を意味せる所の *quatos* にして羅典的には *Amathus* となり語尾「ツス」は縮約して「ッ」となり、こゝに「アマツ」なる言語を得。即ち希臘語「アマツス」は「天津」なり。「日子根」とは羅典語 *Mico* 或は *Micare* 或は *Mican* なる語の「迅速」及び「光輝」を意味せる語にして「ミコ」は「みか」となり又た「ミ」は「ヒ」に轉じて「ミカレ」は「ヒカリ」となり、「ミカ」は「ヒネコ」となりしものなる可し。されば天津日子根の名義は、從來の解釋の如き天に坐せる溫柔なる貴公子の美稱たるに非ずして、敵を屠り、破壊し盡くすの迅速なること、宛も光輝閃發するが如きの神を意味するなり。

活津日子根命——は、從來の解釋に據る時は「生く」の賀稱なりと爲せりと雖、余の思ふ所を以つてすれば、是れ羅典語の *Ichis* 即ち「打撃」「敵軍攻撃」に當て、解釋すべき神名と爲す。今若し「イクツス」の語尾「ツス」を縮むる時は「ッ」となり、吾人は茲に「イクツ」なる言語を得べし。又若し羅典語もて、*Ichis*

活津日子根命

熊野久須毘命

總括

*fulminis* と爲す時は電撃を意味するなり。日本語の「イカツチ」(雷電)は、此「イクツス」と同一言語なりと謂ふ可し。茲に於て吾人は活津日子根命は打撃、攻撃、電撃的威力の神たるを知るなり。

熊野久須毘命——は、從來の解釋を以つてすれば、只だ熊野に祭り、在る所の「奇しき」神なり言ふに過ぎざるなり。熊野とは素より地名にして、彼れの *Kyinos* に當る可し。然りと雖「クスビ」は單に「奇しき」なり妙なりとの歎稱辭に非ずして、猶ほ尙武の意味あるもの、如し。希臘語に *kytos* なる語あり。「クシホス」は「クシホ」となり「クスホ」となり「クスビ」となる可し、而して、是れ「兩刃の長劍」なり。(此劍を揮ふことを *kytos* と謂ふ、筑紫日向の二上の峯の「クシフル」は此意味なる可し)然らば熊野久須毘命は劍を意味せる名義の神にまします可し。今以上に論せし神名の意義を表と爲さば次の如し——

- 多紀理姬命……………尙武勇建の神
- 市寸島姬命……………御稜威、直進、正直、正義の神

編 一 第

尙武の男神女神

田寸津姫命……………突進的勢力、迅速の神  
 正勝吾勝命……………不撓不屈勝利光榮の神  
 天之善卑能命……………血染の神  
 天津日子根命……………破壊屠戮の神  
 活津日子根命……………打撃攻撃電撃の神  
 熊野久須毘命……………兩刃の長劍の神

此くの如く女神と謂ひ男神と謂ひ、從來殆ど平々凡々、何等意味なかりし神名は、吾人の研究法を以てする時は、茲に無量無邊の意味を有し來り、武勇なる天照大御神及び須佐之男命の御子に適當なる勇壯美麗なる神名を得るなり。殊に三女神は先づ之れを天より下して天孫降臨に際して海路の守護神たらしめ給ひし如きに據つて見る時は、是等女神は、平凡なる女神に坐しまさずして、武勇の神たりしや知る可きなり。

然りと雖余は何故に此く武勇の名義を日本の是等の神々に當つるを得るか——果して是れ正當なる解釋なるか、或は牽強附會に非ざるかとの疑

神 話 の 比 較

(三)アテーナ女神の別名

女神種々の名稱

尙武の名稱

大元帥的

問あるは、自然にして、余は其疑問は、決して無理なりと言はざるなり。然りと雖、此疑問は、次に叙する所の希臘神話に對照せば、釋然たるものある可し

三 アテーナ女神の別名

天照大御神は、其男子女子に於て武勇の神性を發現し給ふと雖、アテーナ女神に在つては、種々なる別名に於て此御神の尙武及び平和の諸方面の神性を發表せり。其發表の方法は異れりと雖其精神や一なり。

アテーナ御神は尙武の女神にして能く其の槍を揮ひ給へり——是に於て「バラス、アテーナ」の稱あり。「バラス」は *πάρος* 即ち「揮ふ槍」を意味す、又た「都市の屠戮者」「捕獲物聚集者」「戰爭無疲勞者」「先陣前列戰鬪者」等の稱あり。然りと雖、決して好戰的に勇敢なるに非ず、常に「自衛の精神」「平和」の目的を以つて戦ひ給ふ女神にして、軍神アレーヌの荒れ神的たるとは全然趣を異にし、將帥たり大元帥たる神位に坐しまして、軍略の神たり、統帥の女神たるなり。故に此の女神の捷利たるや、智慧と精神とが、物質的、暴力に對する捷

雷霆と快晴

利たるなり。其『捷利』は之れを神化して「ニケー」*Nike*と謂ふ。「ニケー」は「ニキ」にして「和魂」なるべきか。

希臘神話に據る時は、アテーナイ女神は單に武の神なりと謂ふのみに非ずして、又た高天雲霧なく、晴朗爽快なること、心意の明晰にして判断鋭利なること、を以つて神性と爲す。然るに高天若し晴朗ならんとせば、先づ之れを鼓するに雷霆を以つてし、之れを潤ほすに風雨を以つてし、以つて雲霧を拂掃せざる可からざるなり。

心意の明晰亦然り。或は眞理の懷疑を以つて、或は智慧の破壊を以つて事物の眞相に徹底し、以つて裁判識別すること、猶ほ紫電の黒雲を破るが如く、霹靂一聲頭上に大喝するが如くにして、こゝに始めて心意明晰を得べきなり。嗚呼高天の快晴は暴風の産出する所か、心意の明晰は雷霆的眞理の恩資なるの。此に於てかアテーナイ女神は、高天快晴の神たると共に暴風雷霆の神なり、智識及び平和の神たると同時に亦戦争の神たるなり。

今彫刻及び繪畫等に就いて女神の武装を概観せんか——左手に楯を携へ、

美術上のアテーナイ女神

平和と尙武

右手に投槍を持ち、頭に威嚴ある兜を戴き、胸には「アイギス」*Aegis*なる胸甲を着し給へり。此胸甲は、蛇の如く回轉せる黒雲を、閃電もて縁付けたるを象どり飾れるものにして（曲玉の形なり）、父なる御神ゼウスの與へ給ひし所。以て、強烈なる攻撃的防禦力を示めせると同時に、又此女神の神性を表明せるものなり（或は蛇鱗を以つて模様と爲せるもあり）。

且つアテーナイ女神は、單に自ら武装してアテーナイ國を守護するのみに止まらず、尙ほまたアテーナイ人民に武装を教へ兵術を授け給ひしが故に、アテーナイの人民は實に此女神の門弟子たるなり。

アテーナイ女神此く快晴の神たり、暴風の神たり、戦争の神たり、また平和の神たるなり。是れ奇にして奇に非ず、暴風吹き猛りし後は、以前に優る靜穩と快晴とは來りて、萬物一層愉快に活動するものにして、戦争の後は洋々たる平和の來るも亦其如し。吾人若し平和を求めんと欲せば、之れを武の神に求むるを以て當然となすこと、古猶ほ今の如きなり。

此に於て女神は武装を解きて平和の事業に従ひ、政治を行ひ、學術を勵ま

「日比谷」

女神の舞踏

プラトーンの女神崇拜

し、技藝を奨励し給へり。紡績も織杼も女神の發明し給ふ所、馬を馴致して之れを平時戦時に使用するも女神の教へ給ひし所。此に於てアテーナの神は「ヒッピア」(Hippia)の稱あり。「騎馬者」を意味す(東京の「日比谷」なる語は、此「ヒッピア」を意味す)吹笛の術及び一種の醫術も亦女神の創め給ひし所なりと傳ふ。嗚呼光榮ある平和は武強の資なるか。

戦場の勇者は宴席の歡樂者なり、善く歡樂すと雖、懦弱に流るゝを戒む。アテーナ女神亦舞踏を愛し起つて自ら舞ひ給ふ。然りと雖、徒手の舞樂は樂しむに足らずと爲し、完全に其身を甲ひ、楯と槍とを持つて舞ひ給へり。是れ日本の劔舞に對して、女神の槍舞と稱すべきなり。

哲學者プラトーンが、女子兵役論を爲し女子護國の義務あるを言ひ、また女子の兵役に服する能力あるを言へるは、實に此女神に關する尙武の傳說的信仰と、また其美術上に表はされたる女神の武裝とに基づくものなり。故に其言に曰く「昔は兵役は男女共に同一にして、當時の人々は、時の習慣に従ひて、女神の肖像彫刻等を建つるや、之れを武裝の姿と爲せり。これ雄雌

(四) 弘安の役とペルシア戦争

日本史上の大危機と希臘史上の大危機

共住する所の一切の動物は、其意あるに於ては、男女の差別なく、共同して自己に屬せる徳義を履行し得るを證明せるなり『クリチアス』篇と。

プラトーンの此女神に對する觀念此くの如し。故に曰く「吾國の男子も女子も、凡ての點に於て此女神の徳に倣ひ、戦争の目的にも觀樂の目的にも、善く其厚恩を感謝せざる可からず」『國憲』七卷と。また其常の言とせる所は「此女神の例に倣へ」と云ふにありき。天照大御神を崇敬する吾人は、また此アテーナ女神に敬禮の意を致さんと欲するものなり。

#### 四 弘安の役とペルシア戦争

天照大御神とアテーナ女神の御神性の同一なること前述の如く、全く其同一神に坐すことを示めすものなり。且つ吾人は茲に最も大なる興味を以て是等兩女神の比較研究を行ふべき所は、日本史上の大危機と、希臘史上の大危機とに於て、女神の顯はし給ひし神徳の同一なる事にして、其餘りに同一なるを見るに於て、吾人は一種驚歎の感に擊たるゝ者なり。



ヘルシヤ戦争

アテーナ女神と北風

元寇

ヘルシア王ダリウスの希臘を征せんとするや、使を遣はして、降伏を勧め、其地の水と土とを献せしむ。然るにアテーナイとスパルタとは無禮なりとし、斷乎として之を拒絶し、アテーナイ人は使者を害に投じ、スパルタ人は之を井に投じ、之を殺して曰く『其處より水と土とを取り去れ』と。ダリウス計畫の中途に死し、其子キセルキセス繼ぎ父の志を行はんとして、西洋紀元前四百八十年キセルキセス王海陸軍兵二百五十萬軍艦一千二百艘を以て一擧アテーナイを亡ぼさんとして、攻め來るや、アテーナ女神と北風の神の威力とは、能くヘルシア艦隊を難まして、遂にアテーナイをして捷利せしめたりとは、希臘人の信仰たるなり。

我に於ては弘安の役は全く希臘の波斯役に當れり。彼れ元國、我に無禮の使者を遣すや、北條時宗之を斬り其首を梟す。此に於て元の四軍范文虎を將とし、兵十四萬、軍艦九百を以つて來寇す。龜山上皇宸筆を伊勢大神宮に奉り御身を以つて國難に代らんことを祈り給へり。元軍筑紫に到る。七月一日颶風大に起り、海濤崩駭し、敵艦の大部分は或は碎け或は覆へり、死

神話の比較

對照

者十萬に超え、殆ど全滅の姿となり、ヘルシアのキセルキセスの敗狀と毫も異なることなし。是れ伊勢大神の神威なりとは、日本國民の信する所なり。其敵國無禮の使者を斬るや、彼我同一なり、其伊勢大神宮に禱り、アテーナ女神に禱るや、彼我一なり。其颶風の神助ありしや、彼我一なり。其信仰、其結果の同一なる殆ど寸分の相違なき豈に天下の大奇ならずや、余は天照大御神とアテーナ女神とを同一の御神なりとし、同一なる崇敬を致さんとする者なり。

(日本)

(希臘)

天照大御神の御子……………アテーナ女神の別名  
 其名皆尙武勝利……………同じく然り  
 元寇……………ヘルシア戦争

命の亂暴 | 天照大御神 | 耕の機織と農

須佐之男命の亂暴

織殿に斑馬

### 第九章 天照大御神の岩窟隠れ

#### 一 須佐之男命の亂暴

##### 天照大御神の機織、農耕、調馬

是に須佐之男命、天照大御神に白し給はく、「我心清明き故に我生めりし子手弱女を得つ。此に因りて言さば自ら我れ勝ちぬ」と言ひて勝ち佐備て、天照大御神の營田の畔を毀ち、溝埋め、天の斑駒を御田の中に伏さしめ、又た其大嘗聞こしめす殿に尿まり散らしき。然れども天照大御神は咎め給はず、告り給はく「尿なすは酔ひて吐き散らすところ、我弟の命此く爲しつらめ。又た田の畔毀ち、溝埋るは、地を惜しところ、我弟命此く爲つらめ」と詔り直し給へども猶其惡しき状態止まで轉あり。

天照大御神、忌服屋神衣を織る所に坐して、神御衣織らしめ給ふ時に、其服屋の頂を穿ちて天の斑駒を逆か剝ぎに剝ぎて墮し入るゝ時に、天の衣織女

日神岩月隠れ

天の安河  
思兼神

天兒屋命  
天宇受賣命

見驚き梭を以つて負傷きて死にき。

是に天照大御神、見畏こみて天の岩屋戸を閉て、さしこもり坐しましき。

されば高天原皆暗く、葦原中つ國悉に闇し。是に由りて常夜往く。こゝに

萬の神の聲は狭蠅なす皆滿萬の妖悉に發りき。

是れを以つて八百萬の神、天安の河原に神集ひ集ひて、高皇產靈、神の御子

思兼の神に思はしめて、常世の長鳴鳥を集へて、鳴かしめて、天安の河上の天

の堅石を取り、天の金山の鐵を取りて、鍛人天津麻羅を求ぎて、伊斯許理度賣

命に科せて鏡を作らしめ、玉祖命に科せて、八尺の勾瓊の五百津の御須麻流

の珠を作らしめて、天兒屋命、布刃玉命を召て、天香山の眞男鹿の肩を内抜き

に抜きて、天香山の天の波々迦を取りて、占合麻加那はしめて、天香山の五百

津眞賢木を根許士爾許士て、上つ枝に八尺の勾瓊の五百津の御須麻流の珠

を取り、著け、中つ枝に八咫の鏡を取り、繫け、下つ枝に白丹寸手、青丹寸手を取

り垂して、此の種々の物は、布刃玉命、布刃御幣取り持たして、天兒屋命、布刃詔

戸言禱ぎ白して、天手力男命、戸の掖に隠り立たして、天宇受賣命、天香山の天

の日影を手次に繋げ、天の眞折を鬘として、天香山の小竹葉を手草に結びて、天の石屋戸に汗氣伏せて踏みとゞろこし、神がゞりして胸乳をかき出だして、裳緒を番登に押し垂れき。されば高天原動るぎて八百萬の神共に笑ひき。

是に天照大御神怪しと思ほして、天の石屋戸を細に開きて内より告給へるは、「吾が隠りますに因りて、天原自ら聞く、葦原の中つ國も皆聞けんと思ふを、何どて天宇受賣は樂びし、亦八百萬の神諸々笑ふぞ」と詔り給ひき。

世界再び照明

乃ち天宇受賣、汝が命に益りて貴き神坐すが故に歡喜咲樂ぶ」と言しき。此く言す間に、天兒屋命、布刀玉命其鏡を指し出で、天照大御神に示せまつる時に、天照大御神愈、奇しと思ほして、稍戸より出で、臨みます時に、其の隠れ立てる天の手力男神其御手を取りて引き出だしまつりき。即ち布刀玉命、尻久米繩を其御後方に控き度し、「此より内にな還り入りましそ」と白しき。

須佐之男命の神やらひ

此くて天照大神の出でませる時に高天原も葦原中國も自ら照明うき。

須佐之男命の流

大宜都姫と自然の産物

(二)アポロンの亂暴と其流謫

こゝに八百萬の神共に議りて須佐之男命に千位置戸の罰を負はせ、亦鬘を切り、手足の爪をも抜かしめて、神夜良比夜良比き。

時に霖雨せり。須佐之男命青草を結び束ねて笠蓑と爲し、宿を衆神に乞ひ給ふ。衆神の曰く汝は躬行濁はしくして逐らはれし者なり。如何んぞ宿を我に乞ふやと。之れを拒めり。是を以つて風雨甚と雖留まりて休むことを得ず、辛苦して降り給ひき。(書紀一書)

又た食物を大宜都比賣神に乞ひ給ひき。こゝに大宜都姫、鼻口尻等より種々の食物を取り出で、作り具へて進る時に、須佐之男命其態を立ち伺ひて穢汚物奉ると思ほして、乃ち其大宜都姫を殺し給ひき。こゝに殺され給へる神の身に生れる物は、頭に蠶生り、兩目に稻種生り、兩耳に粟生り、鼻に小豆生り、陰に麥生り、鼻に大豆生れり。神皇産靈の御祖の神取らしめて種と爲し給ひき。

二 アポロンの亂暴と其流謫

彼我類同の神話

テンペーの谿

アスクレーピオ

使鳥鳥

鳥の悪戯

須佐之男命の高天原に於ける亂暴と其放逐との神話は、希臘神話のアポロンの神の亂暴と其放逐との並行神話を想はしめ、又た高天原に於ける天照大御神の機織、耕作及び斑駟の記事は、アテーナ女神と織女アラクネーとの競争談、及アテーナ女神の農耕の神たり、馬匹馴致者たりとの傳説を想ひ出さしむるものなり。余は先づアポロンの神かんやう逐譚を叙せんか。

テッサリアの北方、オリンボス山麓の西南に當りてテンペー(Tempe)なる谿あり。風景絶佳にして、アポロンの神數々此處に遊び給へり。

こゝに又たコロニス(Koronis)なる美人あり、アポロンの神之れを愛して一男子を生ましめ給へり。其名をアスクレーピオス(Asklepios)或はAsculapiusと謂ふ。

アポロンの神、平常より一羽の鳥を飼ひ給へり。或時所用ありてデルフォイの神殿に歸り給ふに際し、其妻コロニスに告げ給はく「吾れ日々おん身の安否は此鳥に由りて毎朝之れを聞くを得可し」と。

此鳥甚だ智慧ありと雖亦多言妄語の癖ありて、事を誤ること無きに非ず

神話の比較

アポロンの失策

誤つて妻を殺し給ふ

鳥鳴きと白羽の矢

彼れ平常は、能く忠實にコロニス及び其子アスクレーピオスの安否を傳へ居りしが、一日戯れてアポロンの許に來り、コロニス變心して、異し男の有りて通ふ由を告げたり。

さすがの神なるアポロンも、欺かれしとは知り給はず、大に怒りて、直にデルフォイの神殿よりコロニスの住へるテンペーの谿へと急ぎ給へり。

其時白衣を着けたる人影、森の樹の間にはの見えしかば、アポロンの神思ひ給はく、是れぞかの己の愛する妻の許に通ふ所のみぞか夫なる可しと、弓に矢つがひ射給へり。

あゝ誤り給へりアポロンの神。白羽の征矢は最愛の妻に當りて、罪なきコロニスは其場に斃れて事絶え居りぬ。アポロンの神悔み給ふもせん方なし。之れが爲めに大に鳥を呪ひ給ひ、從來白色雪の如く、又た人語を爲し得し鳥は、以後之れを穢き黒色と成し又た只だ「カ、カ、」と鳴くのみと成し給へり。

(日本の俗歌に『鳥鳴きでも知れそなものよ』と言ひ、鳥の鳴聲を以つて吉